

野間三郎先生追悼文集

目 次

野間三郎先生略歴		120
序		123
群盲象を憶う	浅井辰郎編	124
野間三郎先生をしのぶ	川喜田二郎	128
グレコの苗が育った	中村和郎 (駒沢大学文学部)	130
先生と私の助手時代	梶川勇作 (金沢大学文学部)	133
野間三郎先生との出会い	野澤秀樹 (九州大学文学部)	135
グレコ会と野間先生	寺阪昭信 (流通経済大学経済学 部)	137
重なる偶然	山口守人 (熊本大学文学部)	139
野間三郎先生の思い出	山野正彦 (大阪市立大学文学部)	141
野間先生の授業	稲田道彦 (香川大学教育学部)	143
野間先生の思い出より	小林光子	146
野間先生から教えて頂 いたこと	仁尾泰明 (神奈川県立川崎工業 高等学校定時制)	149
野間先生	飯野民夫 (埼玉県立所沢高等学 校)	152

本籍 兵庫県揖保郡御津町碓岩60

1912年 5月 5日	神戸市に生まる。	1963年 4月 1日	石川地理学会会長（1965年 3月31日まで 2期連続）
1930年 3月	大阪府立高津中学校卒業	1963年	北陸綜合学術調査団を組織 北陸中日新聞社後援
1933年 3月	大阪高等学校乙類卒業		沿岸諸港湾に関して文化・政治・経済の諸分野にわたって、歴史的、地理的研究を行った。
1936年 3月	京都帝国大学文学部史学科地理学専攻卒業		『北陸と海運』（北陸新聞社 1963年）がその成果、日本海文化を主張する動きを引き起こした。
1936年 3月 31日	京都帝国大学文学部副手嘱託	1964年 5月	中日文化賞（『近代地理学の潮流』）
1937年 3月 31日	〃 助手	1964年 9月	三島財団学術奨励金授与
1941年 3月 31日	〃 講師嘱託	1966年 4月	日本歴史地理学会評議員（1976年 4月まで）
1946年 5月 1日	〃 退職	1966年 11月	人文地理学会協議員（1982年 10月まで 8期連続）
1945年 9月 15日	第三高等学校講師嘱託	1967年 3月	日本海事史学会会務委員
1946年 5月 1日	〃 退職	1967年 4月 1日	石川地理学会会長（1968年 3月31日まで）
1948年 6月 1日	京都新聞社出版部嘱託	1968年 3月 31日	金沢大学退職 金沢大学に日本海域研究所が設立された。
1950年 4月 30日	〃 退社	1968年 4月 1日	東京都立大学教授（理学部勤務）
1950年 5月 1日	毎日新聞社大阪本社調査部嘱託	1976年 3月 31日	〃 停年退職
1952年 4月 1日	立命館大学教授（文学部勤務）	1976年 4月 1日	福井大学教授
1955年 4月	史学研究会評議員（1976年 5月まで）	1976年 4月	福井地理学会会長（1978年 3月まで）
1958年 4月	日本歴史地理学研究会委員（1966年 3月まで）	1978年 3月 31日	福井大学停年退官
1959年 3月 31日	立命館大学退職	1978年 4月 1日	創価大学教授
1959年 4月 1日	金沢大学教授（法文学部勤務）	1988年 3月 31日	〃 退職
1962年 3月	文学博士（京都大学文第206号）	1991年 12月 4日	逝去
1962年	移動学術調査団 中日新聞社後援 富山・金沢・福井・大阪市立・京都大学の学生その他を率いて、富山県庄川を遡り、長良川を下って名古屋に至るファルト・ポートによる調査団、水・民俗・考古学の調査を通じて、東海、北陸の結合すべきことを説いて、「中部		



野間三郎先生（1980年撮影）

論心酒

一尊

丙辰季春
二義先生



序

野間三郎先生は1991年12月4日他界された。享年79歳であった。

先生は、1968年4月に金沢大学から東京都立大学に赴任された。

『東京都立大学地理学科20年史』によれば、同教室は「教員の人事選考にあたっては、対象を特定の大学の卒業者に絞ることなく、その出身校の如何を問わず、広く全国から最も適当な人材を求める方針を当初から持ちつづけてきた」(矢澤大二)ことを特色としていたが、それでも野間先生の着任は驚きをもって迎えられた。この驚きは野間先生ご自身も同じだったとみえて、『20年史』のなかで、「全く思いがけない事であった。文学部の(人文)地理学教室、それも大体一講座で三、四人のスタッフで育ってきた者が、理学部の、それもいろんな講座をもった、多人数の地理学教室に赴任する様なことになろうとは」と述懐されている。

先生にとって、都立大学の教室は「人間関係の煩わしさは全くなかった」ので「まるで無気圧のところに来た様で、身が軽かった。」しかし、研究会を始めてみると、毎回一人宛研究発表をして質疑応答があると、それでおしまいになってしまったから、研究が「貯金のように溜ってゆく方法はないのか。それぞれの研究が互いに関連をもち、組織化されてゆく方法はないのか。なるべくならば、それには、各人が共通の意識・知識・問題をもっていて、その上で討論したり、出来れば協同研究に移ったりしたいものだ」とお考えになった。

これが雑誌会となり、プラトンの『饗宴』にならった「独酌会」に発展して、やがてグレコ会が生まれた。会の名称のいわれについて、先生は、「G(eography)・Re(volution)・Co(ntemporary)をくっつけたのである」と書いておられる。グレコ会では、1974年に「地域のシステム」という共通のテーマを取り上げて勉強した成果を『地学雑誌』に投稿した。1976年には、世界の地理学に革命的な変化をもたらしたといわれるいくつかの論文を翻訳し解題をつけて、『空間の理論—地理科学のフロンティア—』(古今書院)を刊行した。

グレコ会は、先生が1976年に東京都立大学から福井大学、そして1979年に創価大学へ移られた後も続けられ、現在にいたっている。『理論地理学ノート』第1号は1978年に発行された。

この文集は、グレコ会や都立大学の講義などで野間先生から親しく教えを受けた者達を中心になって、先生のご遺徳をしのんで企てたものである。

グレコ会の熱心な会員の一人でもある浅井辰郎先生は、若いグレコ会会員だけでは「野間さんという日本地理学史上の異才の若き日を、色彩豊かに描けない」と心配なさって、京都大学時代の大勢の方々に取材してまとめて下さった。

また、川喜田二郎先生には、とくにお問い合わせして一文を寄せていただいた。

お蔭で、野間先生の存在が一層身近に感じられるようになった。

この追悼文集を先生のご霊前に捧げ、心からの感謝の気持ちをこめて、ご冥福をお祈りします。

群盲 象を憶う

浅井辰郎 編

「群盲象を撫でる。」追悼文執筆に際してまず思い浮かんだのはこの諺である。野間さんは有能多才な反面、隻語癖だったためか、野間さんを語る人々の話は、象を語る群盲の話に似ている。そのため、ここには私一人の狭い思い出より、京大地理出身者などの広い思い出を綴り合わせることにした。もっともこれらの方々が盲だと、決して私は言わないが。

なぜ地理を？ 学生の頃

これについて定説はない。昭和11年卒の同級生11人中、浅井得一氏は「野間君は京大に来るまで大阪以西・京都以東に行った事がないのだから、地理学に興味があったとはとても思えない。現に立命館大学の巡検では、現地の先生に説明をお願いしていたし、それが出来なかった会津では『あれが磐梯山だ』と一言言っただけだったという伝説がある。」

同級の神尾明正氏は「だから本の上で出来る地理学史をやったのさ。実際、彼は得意のドイツ語の本を東京のグスタフ・フォックから山ほど買込み、借金で困っていた。……僕たち3人は皆、個性は強かったが、妙にうまが合い、荘子にある『千里ゆく者は三月の糧を聚む（あつむ）』に因んでこの仲を『三聚』と呼び、3年間、よく学び、よく遊び、よく助けた」と。

ドイツ語文献をよく読んだことは、得一氏も十分認めており、同級の須藤賢氏は「石橋教授普通講義の際、彼は数冊の原書を机上に置いていて、高校時代からよく地理学を研究していた学生と感じました。講義の後で『先生おかしなことを言ってる』と、時に相当批判的な言もありました。学年試験にも沢山の原書を重ねていました」と書いて下さった。

2年後輩の伊藤博氏（1992.12.6没）も、野間さん最大の印象は羨ましいほど本を買った事だという。

しかしその頃の学生生活は決して楽ではなく、須藤氏も内職（アルバイト）に精を出したそうだが、野間さん兄弟も例外ではなかったらしい。特に彼は、脛かじりに弱みがあった。得一氏によれば「野間君は卒業面接のころ、ひどい風邪をひき高熱で出席困難だった。事務室に聞いたら父親自筆の延期願が必要というので、わざわざ大阪まで貰いに行った。お父さんに宛名を聞かれて、文学部長と言ったら、吃驚仰天して『三郎は経済学部ではおまへんか？』こうして3年間の頬かぶりがばれてしまった。お父さんは大阪の株屋関係にお勤めだったが、収入は波がひどかった模様で、協力者・後継者が欲しく、息子たちを経済学部か法学部に入れたかったらしい。ところが兄の野間光辰氏は京大文学部国文科にはいり、後に西鶴の研究ではその第一人者になった……彼はこんな家庭の事情を一言も言わずに、地理を3年間やったのだ。まあ次の弟の五郎さんが大阪の実業家になったのだから、お父さんも満足されたろう」と。

筑波大の手塚章氏は、1991年に出した『地理学の古典』に、野間さんの主要著書を数点引用している。だが「それらからは、なぜ野間さんが地理学史に取っ付き、どのように掘り下げようとしたかは読み取り難しい」と。

この辺に関して、私と同級（昭14卒）の柴田孝夫氏の説を聞こう。彼は長く東京都立大学付属高校にいたが、「野間さんの研究室に行くと、出入口近くに大判の藤田元春先生の写真が掛かっている、野間さんは出入りのたびに写真にお辞儀をしていた。なぜだろうと思ったが聞き損ねた。藤田先生は野間さんの大阪高校時代の恩師で、閃きの鋭い日本地理学史講義、豪放磊落な人柄は高校生の信望を一身に集めていた。野間さんがこれに魅かれて西洋地理学史に沈没したのは十分考えられる。その結果が肖像へのお辞儀ではなかったろうか」と。その後私たちが京大で藤田先生の講義を伺ったのでこの説は十分に首肯できる。

最近、野間さんの4年先輩に当たる織田武雄氏に会い、なぜ野間さんが地理学を始めたのだろうかとか伺ったら、即座に「野間君は藤田先生に大変心服していたので、高校時代から彼の性格に合った地理学史に夢

中になったのやろう」と柴田説とびつたりのお話だった。

広い野間学と野間人脈

この織田さんは野間学について「その第一は、ヘットナーの『地理学その歴史・本質と方法』(1927)の翻訳である」と、昭和11年入学の編者が入学早々大変興味を引かれた小牧先生の地理学普通講義(新制大学の教養部講義に相当)は、最近知った事だが、実にこの野間訳が底本であったという。「第二は1940年ごろ京都帝国大学二千六百年記念史学論文集に出た『磁石島小考』である。この伝説の島はインド洋にあり、鉄を帯びた船を引き寄せて難破させるといふ。その独自の考証には目を見張る。第三は当時、京大にも東大にもなかったR.ヘンニッヒの『テラ・インコグニタ』(1935年版か改訂版1944~1956年)を自ら買い込んで、その重要な部分を紹介した事である。この本は古代からコロンブスのアメリカ発見までの世界探検史を集め、法顕や玄奘も出て来る。その他に理学部には小川琢治・中村新太郎先生がドイツから買い込んだ膨大な地理書があり、野間君はリッター、ペッシェルなどを次々に借り出してよく読み、立派な論文を書いた。特にペッシェルに関する卒論は、今の修士論文の域を遥かに抜き出ていると思う。野間君はこのように蔵書家であり、読書家であった」と。なるほど『近代地理学の潮流』(1963)の序文には、上のお二人のほか、石橋五郎、小牧實繁、小野鉄二、織田武雄、松井勇、西川治、石部修博士などからの貴重な典籍の借用あるいはご教示に対して、深甚な謝意が表されている。なお野間さんの本で同じ頃に出た『地理学のあゆみ』(1962)は、決して西洋地理学史だけではなく、各時代ごとに中国と日本のそれを挟入した前人未到の書で、執筆のご苦勞は並大抵ではなかったと思う。しかしこの二書などの評価はもっと適当な他の寄稿者に譲りたい。

このように野間さんは日・中の地理学史にも造詣が深かった。私がお茶大にいた頃、野間さんは地理学史の半年講義で来学された。これを縁に、野間さんはしばしば古い原書を見に図書室に立ち寄られ、助手の貝山久子さんが応対した。貝山さんはその後、地図情報センターに転出したが、電話で野間さんの思い出を尋ねたところ、次の返事を得た。「昭和61年秋に機関誌『地図情報』に地震地図を特集しました。地図の中に石川県原田正彰氏蔵の『大日本国地震之図』があり、たまたまこれについて、野間先生が、人文地理17巻4号に詳しく紹介しておられたのを覚えていましたので、地図情報への解説をお願いしました。しかし先生は大分弱っておられたようで、引き受けて戴けず、已むなくそれを抄出しました」と。私はこれに力を得て野間論文を探したところ、これは11ページに亘る長編で、秋岡論文などを引用して精緻な考証を行ない、意見として「地震のあった年には竜絵を施した日本図が出されたということになる。このことは案外見逃されやすいが、重大な事実ではないだろうか」と。野間学はこんな方面まで広がっていたのだ。

さらに驚いたことは、この論文の次に室賀信夫先生(3年先輩、京大助教授、昭57没)の「大日本国地震之図私考」があったことである。「昭和39年の夏、金沢の野間三郎教授から大日本国地震之図の写真が送られて来た時、正直に言って私は心がときめいた……」で始まるこの論文は、昭和58年に東海大学出版部から出た遺稿集『古地図抄—日本の地図の歩み』の11論文の一つとなっており、その見事な竜絵のカラー写真はカバーと口絵の1枚にもなっている。お二人の間にはこんな見事な研究上の連係もあったのだ。

6年後輩の阿部正道氏(16年12月卒)は福山藩主の第16代目で文京区に住むが、「野間さんは昭和31年1月23日に拙宅を訪ねて下さった。秘蔵の『文化八年久那志里島登麻里ニ来り所捕魯西亜人加毘丹』図を見られて『これは室賀さんに見せたら喜ぶますから』と京都に持参された。この士官は先生により『グロウニン』と推定され、以後展示会などで注目されるようになった。また『大日本国地震之図』と金沢文庫蔵の『日本図』との関連もご教示戴いたので、昭和49年の夏の神奈川県博覧会にはこの日本図を展示した。この時、野間さんは熱心に見て廻られ、後で一言『疲れました』と言われたのが、いつまでも頭に残りました。」

柴田君の話では「野間さんは金沢にいたころ、創価学会の創始者牧口常三郎に関する論文を書いて創価学会に送ったことがある。その内容・意図はよく分からないが、結果として将来のポストに繋がるものだったかも知れない。その後求められて都立大の専任になったが、都立大を辞めてからここに移ったのは、そ

の根が続いていたからかも知れない」と。野間学のこんな面はほとんど知られていないと思う。

この辺で野間学を、2年先輩で立命館大学の山口平四郎氏の手紙で総括したい。「フンボルト、リッターに始まるドイツ正統派地理学に関する野間君の学殖については、その助手時代とこれに次ぐ講師時代に同君を知る人々が、等しく評価しているところである。終戦後、大学から離れていた野間君は、昭和27年春から7年間、立命館大学教授として教壇に復帰された。ここでは特に地理学史と地理学方法論の分野で優れた業績をあげられた。また野間君の大阪高校時代の恩師、藤田元春先生が山梨大学を定年退官された後、立命館大学に特別任用教授としてお迎えできたことには、同君の陰の尽力が大きかった。昭和31年春、藤田先生のご着任によって、大学院地理学専攻に博士課程の設置が認可されたのである。……このような功績もあって野間君は昭和60年4月に勲三等瑞宝章を受賞された」と。

終戦後、大学から離れていたとは、戦争中に参謀本部がアジア施政のため京都に置いた皇戦会が、戦後GHQから睨まれ、地理学関係者が10人近く追放されたためで、野間さんは囲碁指導で、小牧先生は古書店主で糊口された。

助手の前任者米倉二郎氏（昭6卒）は「野間さんはクラスの中で物静かな余り目立たないというより、目立ちたがらない控え目な方でした。この点、令兄の国文学者光辰氏とは一見対照的に見えますが、ともに酒豪で、ユニークな発想で物の真実に迫る研究態度は、大阪近世の町人学者の良い伝統を受け継がれた方と拝察しました。」正に透徹したご高見である。

人情・趣味・隻語・家庭

野間さんはクラスの卒業成績がトップで、小牧先生の信任も厚く、1年間副手をした後、昭和12年春から助手になった。それは私たち4人が2回生になった時で、実習に巡検に随分お世話になった。特に同級の林宏君が故あって卒論を提出せずに吉野の山奥に隠れた時は、私たちと一緒に懸命に探し回って下さった。無口で親切で、キャッチボールは直球だったが、怠け学生にはどこか近寄り難い面があり、『京都帝国大学文学部地理学研究報告I』に卒論の「オスカー・ペッシェル」が出るに及んで、ますますその感を深めた。

さてこの林君から次のような返事が来た。「お散歩の憩い場だった我が家の狭い庭には、野間さんが剪定・接木された玉椿などが今年も咲いている。縁側に寛いで一杯やりながら伺った数々のお話——深い植物趣味、絵画、篆刻、書評、戦後の苦しい生活など——今も尽きない我が家の話題である。日頃、人前に出ない家内が、野間さんとだけは内輪のようにお話できたのも全くその優しさで、一番懐かしい方の一人である」と。また米倉氏は「週1回和歌山から出講しましたが、いつも野間さんが親切にお世話下さったことが、身に沁みて忘れられません」と書いて下さった。野間さんの親切は、後輩の学位取得にもよく現われている。学位論文は内容がいかに優れていても、提出先の事情もあり、一度で成功するとは限らないが、野間さんは飽かずによく尽力されたと聞く。

野間さんの趣味には一家を成す碁と将棋がある。織田さんによると「野間君は夏の暑い昼休み、書庫に椅子を並べて寝転がり、寝ているかと思ったら熱心に碁の本を研究していた。祇園の芸者に碁を教えていた藤田五段？の所に、尊氏直系の足利惇氏氏とともに通ったこともあるらしい。こうして腕を磨いた彼の碁は、同氏に言わせるとねちねち型で、彼の性格をよく現わしていた」と。芸は身を助けて、戦後、新聞への囲碁指導で糊口し得たのは、その高い腕前を物語るものであろう。

同級の木村憲治氏からは「彼も私も将棋が好きで、時々野間君宅を訪ねて将棋をした。彼は定石に詳しく、多くは私の負け。私が勝つのは長引いて乱戦になった時だけ。」という貴重な手紙もある。野間さんが一度「浅井君、これ読みなさい」と言って将棋入門書を下さったことがあった。有難く押し戴いて赴任先の満州まで持って行ったが、今もって猫に小判なのは何とも申訳ない。

5年後輩の中田栄一氏は「京都の下宿が野間さんのお宅に近かったので、毎日のようにお邪魔した。学問的に厳しく、時には皮肉めいたことも申されたが、穏やかなお人柄に親しみを感している。『あゆみ』や『潮流』の名著も著わされたが、『地理学研究報告II』に書かれた「フンボルト覚書」は深く印象に残って、

今も私の地理学観の基礎になっているように思う」と。毎日のようにお邪魔できたのは、正に野間さんの人徳である。

だがこの文中にある「皮肉めいたこと」は他の人々も一部は感じていたようだし、「へい、そうでっか」など、ごく短く表現する言葉づかいは、阿部氏の言う隻語癖と共に、周りの人々には理解しにくく、時には誤解を生じたい。「野間さんは奥の知れない人」という一部の評は、このためだと惜しまれてならない。

もっとも次のような面白いお話もある。今回戴いた故室賀先生夫人恵美子さんのお手紙ではユーモラスに「例えば、会話の中で『娘が重症だ』とおっしゃるので、私もお案じしながら伺っていると『もう登校してまん』とストーンと落されました。でも悪意を抱くようなものではなく、落とし上手とでも申しませうか、魅力のある方でした。ある日、主人が申しますのに『人は野間君のことをいろいろ言うけれど、僕は好きだな』で、安心致しました。今頃二人は再会を楽しみながら、落し落される快感を味わっていることでしょう」と。

話は遡るが、野間さんは助手時代に結婚され、大学に近い北白川の平地部に新居を構えた。結婚式は大阪のホテルで盛大に行なわれ、我々学生も招待されて、引出物に銀製のバックルを戴いたのが印象に残っている。新婦は小肥りで、多くの子宝に恵まれそうだと言われた。現在の規代夫人で、囁きは当たった。林君いわく「よくお話に出た成之さんや克子さんたちも立派に成人され、本当に野間さんは幸福だ」と。

新居には、奥様のお見立てと思われる数々の調度が揃い、何もかも真新しかった。中でも国連事務総長のブーメラン型デスクなみに、畳一畳以上もあるピカピカのデスクの長辺中央に、体が入る凹みを付けたアイデアは、野間さんの自慢の種だった。

野間さんとお酒

どの方のお手紙にも、ほとんどお酒の話が付いている。織田さんは「野間君は文字通りの酒仙で、ほんまに酒を楽しんだな。木屋川の『高瀬舟』に一緒に行った時、陶器を褒めちぎって大層主人を喜ばせ、うまいお酒を味わった。金沢大学へ集中講義で行った時は、犀川のゴリ屋で仲居にずいぶん顔が効くので驚いた。しかしどこでもバーや女性には関心が薄く小料理屋での独酌が好きで、どちらかと言えば陰気な酒だった。閉口するのは酒が長くて、三時でも四時でも開いている店をよく知っており、同じことを繰り返して聞かされた。でもついに心の内は言わなんだな」。

米倉氏の「学生時代から兄弟とも酒豪」は前に書いたが、別文に「私はお酒が飲めませんので、野間さんとゆっくり話し合う機会がなく、済みませんでした」とあり、木村さんからも同じ趣旨の手紙を戴いた。私も飲めないが、野間さんが東京に移られたのを祝って、拙宅で興亜寮会という酒宴を開いた。興亜寮とは満州国の新京にあった民間下宿で、昭和17年頃に浅井得一、伊藤博と私の3人がとぐろを巻いていた。野間さんと3人は昔話に杯を重ねること頻り、ついに野間さんが同じ事を繰り返して繰り返して喋るほどに酔い潰れた。泊るようにあれこれ薦めたが、とうとう深更にタクシーで帰られた。

得一氏は「野間君が泊まった時に『一升瓶と梅干を一鉢出してくれば後は何も要らない』というのでそうしたら、翌朝には両方ともあらかた無くなっていた。」酒豪が客の味覚の突飛さに驚いた述懐である。

「出る前に一杯、大学で一杯、帰る途中でもう一杯」という噂は、いろいろな意味で聞く者をハラハラさせた。学生から文句は出ないか、肝臓を痛めないか、天寿を全う出来るか、どう忠告したらよいか、等々。

この解答の一部は、この追悼文集の中にもきっと出ていよう。読める日が待ち遠しい。中田君の「80才近くまで長生きされたのだから、野間さんにとってお酒はむしろ薬であった」という慰めも一つであろう。

以上、なるべく多くの方々の追憶をまとめてみた。しかし才能に恵まれた野間さんの姿のごく一部に過ぎまいし、きっと間違いもあって、あの世で「一寸も分かってへんの一」と嘆かれるのではないだろうか？ご冥福と御遺族のご清栄を心よりお祈りする次第である。合掌

野間三郎先生をしのぶ

川喜田二郎

「地理学教室にはネ、野間さんちう、文献のことに恐しく詳しい先生がいやはる。君もいろいろ教えてもろたらええやろ。」

これは、いよいよ三高から京大の地理学へと進もうと志したとき、大先輩の今西錦司さんが私に教えて下さったことである。今西さんは動物生態学を専攻していたが、同時に植物生態学にも詳しく、特にその方面で最も著名な F. E. クレメンツの学説などは身を入れて検討しておられた。その上、人間社会の生態学にも最初から関心が深かった。

そのせいか、今西さんは同じ京大の地理学教室からは相当本を借りだし、私も後年時おり、その地理学書の中でエンピツ書きの今西さんの傍線に出会ったものである。こんな御縁で今西さんは古くから野間先生と顔見知りだった。そこで後輩の私が地理学教室でまず尊敬し親愛感を覚えたのが、すなわち野間先生であった。

果たせるかな、地理関係の文献、特に地理学史やその学説史については、私はただただ御教示に学ぶばかりだった。地理学のオーソドキシニーについては、学界でも筋の通った威厳があり、学会で御発表の時にはその分科会場が殊の他賑わったことを思いだす。

私たち若手にとっては、小牧實繁先生は雲の上の人で、室賀信夫先生・野間先生の方が親しみやすかったのは、自然のなりゆきだった。しかし室賀先生は永らく御病床にあったため、後年時おりお手紙で御教示や御激励を頂くに留まった。残念である。これに反し、野間先生とは京洛の巷をハシゴ酒のお伴をして飲み歩いた想いでも何度かである。小牧先生の戦後間もなくのパージに、野間先生も巻き添えを食った形で、幾分世をすねておられたのかもしれない。

しかしこういう日々を通して私は、人世の悲哀も陰影も弁えた先生のお人柄に、惹きつけられていった。先生の方も何かと目をかけて頂き、忘れがたい。中部地方の地域開発の問題で名大の松井武敏先生や中日の足立省三さんと語りあったり、福井大学へ講演のお招きにあずかって生態人類学の掛谷誠さんとの出会いが飲み屋で始まったりで、思い出はとめどなく続く。

その中で、野間・足立・川喜田三人の謀議で行われた「組み立てボートによる中部地方横断」というヤクザなイベントもあった。野間先生が隊長、私が副隊長で、大阪市大の助手だった朝日稔さんがとりまとめ、大阪市大の探検部の学生諸君が張り切るという構図。それを中日が応援して下さった。当時金沢大学の教授しておられた野間先生の口添えで、金沢大学の学長まで声援して頂いたのである。

組み立てボートは頑丈無類の特殊ゴムで、フレームはペニヤ。残念ながらヤマハのできあいのエンジンしか間に合わなかったので、ボートの吃水は三人も乗って僅か一五センチなのに、スクリューは四五センチ。行動は制約されざるを得なかったが、時間切れで、まことにやむをえなかった。こんなボートで日本海側の庄川を河口から遡り、七つのダム湖を皆走り、蛭ヶ野の分水嶺をボートを分解して担ぎ、また長良川を走って桑名まで、ボートのテストをしながら九日間で横断したわけだ。

なぜこんな酔興なことをしたかという、そこには主謀者たちの長い学問的懇談会が起爆力となっていた。ひとつは海外の学術探検で採集品その他装備を川・湖で運ぼうという魂胆。しかしそれ以上に大切だったのは、日本という国を、もっと水界中心の生態史的観点から見直そうという点だった。古代に遡る程われわれの先祖は水界を拠り所にこの国を開いたのではないか。水界は海ばかりではない。昔に遡る程川は重要で、特に交通路としての重要性を、この生身でもう一度実感してみたい。

川が汚染され、大きな社会問題になってきたのも、思えばこの「中部横断」から10年以上も後だったろうか。このイベントの頃既に、私たちは国民がもっと川を知り、理解し、生活に利用する必要があると語っていた。利用してこそ川への愛情が深まる。この愛の世論こそ、清流を保存する力となるものである。

冒険的な企画だった。後日野間先生は室賀先生に語られて曰く、「稀代の煽動家川喜田君にのせられて、たいへんな目にありましたよ。」とか(仄聞)。だがそんなことにも懲りず、東京都立大学の教授をしておられた当時には、私に学位論文を出せと、叱らないばかりにお勧め頂いた。ちょうど学位の旧制から新制への切り替え時で、その谷間にはまって学位申請を放任していたのが、私と畏友岩田慶治君だった。この頃の文科系の卒業生の常で、先生が勧めなければ学位論文を出そうとしないのだ。私が「岩田君もいっしょに出してもらったら。」といったら、「私は間もなくやめてゆく。二人も面倒をみられませんな。」との、すげない御返事。

こういうわけで、野間先生の御懇情ある申し送りにより、私は都立大学理学部で地理学科の矢澤大二・中野尊正・戸谷洋諸先生の論文審査を受け、理学博士の学位を頂いたのである。

野間先生のリードで、堀川侃さんと私などが加わり、「生態地理学」ともいうべき新しい地理学への情熱がもえていた。それ程明確な形もとれず、漠たる流れであった。それにも拘わらず、そこには確かに凝集しゆく何かがあった。私たちの共有する共感的な情熱の中心に野間先生があった。このことについて、更につっこんだ学問談義を交えたかったが、その機を得ずして先生を失ったことが、今となっては私のいちばんの痛恨事である。

野間先生から頂いた昭和62年3月9日付のハガキが絶筆となった。『冠省 御高著「素朴と文明」ありがたく頂戴いたしました。甚だ壮大な構想で驚嘆。立派です。見事です。感服しました。有難う。』野間先生にこんなほめて頂いたのは初めてで、とても嬉しい。しかもうひとつ嬉しいことは、この愚著の一部に、例の日本人水界民説が書いてあり、ヤクザな組み立てボートのことへのべられていたことである。先生はさぞかし苦笑しつつこの生態地理学の部分を読んで下さったことだろう。

野間先生との見果てぬ夢であった生態地理学は、その後も私の中でもえ続け、最近に至っていっそうはつきりと方法論的な形をとってきた。これを何らかの形で今の地理学界に問題提起することが、野間先生の学恩を受けた私の宿題である。

尊敬すべく、また懐かしい人、野間先生よ、さようなら。

グレコの苗が育った

中 村 和 郎 (駒沢大学文学部)

電話で野間先生ご逝去の報に接した私は、どうしても信じたくない気持ちだった。数日前にご家族からの報らせて、都立大学の杉崎順子さんとお見舞いに行った折、先生は久しぶりに対面する杉崎さんの手をしっかりと握りしめて喜ばれた。帰宅すると早速全国にちりちりになっている旧グレコ会のメンバーに手紙を書いた。「先生をはげまして下さい。お元氣になられたら先生を囲んでシンポジウムを開きましょう」という趣旨だった。これに応じた電話や手紙が届けられる間もないうちの訃報であった。

私がグレコ会の前身となる研究会に誘われたのは、私が気候学関係の講座から地誌学講座に所属が変わった後のことであった。身の恥を包み隠さずと書くと、その頃の私は、初めからこの会のメンバーだった野沢さんや梶川さん達の議論の内容が理解できなかった。気候学は地理学の一部であるのだから、地理学のことがわかると考えていた自分が間違いだっと思い知らされた。そのうちに私にも話題提供の順番が回ってきた。どうしてそうなったのかをはっきりとは覚えていないが、「移動」がテーマだった。正直なところ、なぜ移動が地理学なのかさえわかっていなかった。商品の移動もある、人間の移動もある、気候現象だって大気やエネルギーの移動によって起こるのではないかと思ひあたって、自分の頭で移動のことを考えていくと、今まで商業地理学、交通地理学、気候学などと独立した学問と思っていたものが違って見えてきて、不思議な興奮を覚えたことを思い出す。

グレコ会第1回集会は1974年1月26日に開かれている。そのときに全員に配られたメモには、野間先生ご自身の手でこう書かれている。

Greco Society
第1回 集会
'49/1/26 15:00~
於 都立大目黒校舎

○会名：とりあえず略称を Greco Society とする。
○会合：月1回、第1土曜 15:00~を原則とする。
—但し次回は 2/16(土)
会場は原則として目黒校舎
—但し夏・冬は合宿

○報告：次回は Chorley, R.: Directions in geography. 各章を分担。
Part I Theoretical 寺阪
" II Spatial 梶川
" III Environmental 中村
" IV Temporal 堀
" V } Educational } 野間
" VI } Ethical }

○作業：new geography or revolutionary G.に関連する書物・論文をカード化して次回に持寄る。
○予定：第3回集会で各人の分担すべき分野・テーマを定める；12月に報告書執筆開始のこと。
(モットー：楽しくやり且つ締くゝりをつける)

会員：野沢・寺阪・野間・小林・堀・中村・梶川
 客員：山岡・山口(守)・門村・土井・(西川)
 会則・会費：省略

ファイルを繰っていくと、次のような「グレコ会(通信・ノマ)」も見つかった。これには日付がないが、多分1975年5月31日のものと思われる。

Greco Soc.について

- (研究) 発表
- シンポジウム
- 合宿
- 業績刊行
 - 文献を教えあう
 - たづね合う
 - 捜し合う
 - 資料(コピー)の交換
- 基金
- 永続性
 - 絶えず形 { (問題) を変えること
 会員
- 定期性(月1回とか)
 - 永続性につながる
- 急に拡大せぬこと
 - 空虚な拡大 → 破裂
 - 自然の拡大(客員その他)(外部)
 - 最適人口(の維持)
 - Local Association (community)
in Metropolis (town)

無駄のない表現と味わい深い筆跡を見ていると、野間先生がグレコ会に対して初めから終りまで非常に熱心であったことがうかがえる。グレコ会は、先生が理想とお考えだった研究会を実現しようとなさったのではなかったのだろうか。

グレコ会は、「地域のシステム」について勉強することになった。人文地理学を専攻している者も、私のように気候学をやってきた者も共通に議論できる、地理学の古くて新しい問題を先生が選んで下さったのである。その成果は「地域のシステム」に関する諸外国の研究—その展望」という題で地学雑誌(1974)に掲載された。地域のシステムに続いて、地理学に革命をもたらしたといわれた「新しい地理学」の諸論文を読み合って議論を重ねた。乗鞍で合宿したことも懐かしい。重要ないくつかの論文を分担して翻訳し、『空間の理論—地理科学のフロンティア』(古今書院, 1976)にまとめた。先生はこの中で、地理学の革命の背景と、問題点を整理された序文を書かれるとともに、「新しい地理学」の発端をなす最も重要な2つの論文の翻訳を受け持たれて、解題をつけておられる。地理学史を徹底的に研究してこられた先生だからこそ、新しい地理学の意義を正しくとらえて、来るべきポストニュージオグラフィへの変化も予見しておられたように思われる。

グレコ会では、われわれが調べたことを発表するだけでなく、先生ご自身があるテーマについて話して下さることがあった。「河谷研究と村の分類」について話されたとき(1978.7.8)のテープが残っている。

ヨーロッパにおける研究史を順序立てて話され、日本の言語学者の研究方や老子の思想にまでも言及された含蓄のある内容である。そして、ずっとあたためておられた独自の研究構想をもらしてもおられる。このテープを改めて聞き直してみると、なぜもっともっと教えを乞わなかったのだろうかとか悔やまれる。

テープといえば、「卒論の書き方」を都立大学の学部学生に教えられたときのものも保存されている。都立大学の卒論や修士論文は「研究でもない、レポートでもない」と断じられ、「能力のある学生達に、時間を費やして調べさえすればいいと思わせるような指導者が悪い」とも言われて、論文とは何かを諄々と説いておられるこの講義は、研究を志す者が一度は聞く価値がある。巧みなユーモアを交えた味わい深い語り口をここに再現できないのが残念である。

目黒校舎での研究会が終わった後の“シンポジウム”が本当のグレコ会であった。「シンポジウムというのは、もともとお酒を飲みながらするもの」と教えられた先生には、「作法」のようなものがあった。「わたしはダイニホンテイコクシュギシャ」と言われるので耳を疑うと、笑いながら「大きい銚子で2本やって、定刻になったらやめること」と解説された。アルコールがほどよくまわって誰かが話題を独占しようとする、先生は他人の話の聞くことが大事なのだと諭されるのが常だった。だから、われわれのシンポジウムでは誰が先輩で誰が後輩ということもなく、お互いが自由に話し合えた。次に何を勉強するかということも、本の題名も、このような場で決まったと記憶している。アイディアをB6版の京大式カードに書いて出し合って整理してゆくやり方では、全員が参加しているという実感をもつことができた（私は野間先生とKJ法の川喜田先生との関係をもっと知りたいと思っていた）。

野間先生は都立大学を辞められた後、金沢のご長男のお宅から福井大学に通勤された期間がある。告別式の日、ご長男の奥様がこんなことを話して下さいました。

「晩酌のときにグレコ会のお話をよくお聞きしました。この会ではみんなの会話がこんな風が続くのですって」と、奥様は右手でピンポンのラリーが続く様子を指された。ああ、先生もわれわれと同じように感じて下さったのだなと思ったところへ、奥様の言葉はまだ続いた。「そうしていると、今度はこんな風に、みんながだんだんと高いところに昇って行くんですって」と、奥様の右手はラセン階段を昇る様子を表していた。

私は打たれたようにハッとしました。シンポジウムで、先生は時折、会話の流れとは関係なさそうなことをポツとさしはさまれることがあった。それが唐突なので一同の笑いを誘って一段となごやかな雰囲気になったり、知らぬ間に話題が新しい方向へ転換したりした。今にして思えば、これはわれわれを高いところへ導く仕掛だったのかもしれない。シンポジウムが終わって帰路につく誰の顔にも充実感がみなぎっていた。何も知らない家内が私に向かって、「最近、少し変わってきた」と言ったのもその頃だった。

グレコ会は、杉浦芳夫さんたちの努力で今でも毎年2回ずつ開かれている。以前と同じように刺激的で活発なシンポジウムになるのに、野間先生がおられた頃と何かが違う。それはきっと高いところへ導くこの仕掛がなくなったことなのであろう。

八王子のセミナーハウスでの合宿で散歩をしているとき、宿舎の番号が若木の葉の数で表されているのを見ながら、セミナーというのは苗を育てるという意味なんだよと教えて下さったことが昨日のことに思い出される。

野間先生がわれわれに蒔いて下さった種子は、小さな小さな芽をふき始めて、銘々がそれを大事に育てようとしていることは、本書に寄せられた追悼文の各所ににじみでている。先生の教えを受けた者達は、現在、全国各地でそれぞれの職業についている。しかし、研究テーマが違い、職業が違っていても、共通の苗を大事に育てているという無言の理解がお互いを結び付ける強い絆となっている。先生が望んでおられた永続性がこんな形で保持されているといっても言い過ぎではないであろう。

先生と私の助手時代

梶川 勇 作 (金沢大学文学部)

逝去の4日前、先生(野間先生以外の方は「何々氏」と表記させて頂く)に相模原のご自宅で、お会いできた。その前夜、先生の長男・成之氏(金沢市在住)から電話があり、「父の容態が急に悪くならしい。梶川さんに連絡するよう母から言われた。私は明日、行きます」とのことであったので、相模原への同行をお願いした。ご自宅へ伺うと、先生は少し前に来た土井氏と話をして疲れた由で、床についておられたが、笑顔で私の手を握られ、「研究を……」と言われた。土井氏との帰り道、「今日の先生の笑顔は忘れられないだろう」と思った。

私は昭和(以下、昭和を省略)43年7月から50年3月まで都立大学で野間先生の助手を勤めた。先生は、43年4月に金沢大学から都立大学に移られた。4月末、先生は名古屋大学に来られ、私の恩師・松井武敏氏に助手候補の推薦を依頼され、博士課程に進学したばかりの私が推薦された。7月1日付で、私は野上・堀の両氏とともに助手に着任した。

野間研究室は深沢B棟の404、私は402Bに大石氏と同室、その間に、渡辺研究室と横田研究室があった。私は助手であったが、先生の大学院特論(たいていは野間研究室で開講)を拝聴した。43年「クリスタラーの理論」、44年「空間論」、45年「中心と周辺」、48年「地域分化」などである。

大学からの帰りによく同道した。先生は都立大学に来られるまで定期券で電車通勤された経験がなく、「酒を飲んで、勇気を出さないと、電車に乗れない」由で、夕方、先生から「帰りまひょか?」と声がかかると、たいていは、お供をした。都立大学駅前の「亀鶴食堂」が最も多かったが、「真さ」、「がくや」、「あげ幕」、「鳥半」や自由が丘駅前の「一番」、「金田」なども行った。これらの店は今でもあるのだろうか。

先生の旅のお供をよくした。特に、46年と47年には、日本システム開発研究所の仕事(生活圈および道路網の調査)で、先生・野沢・土井・私の4人は、郡内、新潟、伊賀、津軽、三次、鹿島、秋田などへ旅行した。その調査結果は、建設省の報告書として出されたが、先生と私は別の観点から、「地方小中心の成り立ち」(『地理』18-4, 8, 9)を発表した。また、46年7月と48年4月に、石川県『津幡町史』の酒造業調査にお供した。金沢での宿は東別院の横の「いしや」(料理屋が本業)で、その箸袋の裏に先生の名前が今でも記されているほど、先生の懇意の老舗である。私が今も「いしや」を利用するのもその縁である。ちなみに、48年の時、「ごりや」へ昼食に連れて行って下さったが、その後は一度も行けない。それほど格式の高い料亭であったのである。

先生と一緒にした仕事の一つに、46-47年度の「都市概念の総合」研究がある。これは、都立大学都市研究組織委員会のもと千葉正士氏(法学部教授)が主宰する研究グループで、地理班として、先生・野沢・梶川が参加した。その成果が野間三郎編『都市の概念・各論2(地理学)』(東京都立大学, 1973)である。21項目の内、先生は、ヘットナー、ハッシンガー、ポベック、ガイスラー、木内信蔵を執筆された。

先生の発案で、43年から「雑誌会」が開かれた。多数の外国雑誌を個人が目を通すのは大変であるので、少なくともコピーした目次だけでも集まって見ようという趣旨である。これと平行して、いつからか「ブラッシュ会」という研究会が先生を中心に持たれた。46年2月19日-21日に会のメンバーで房総を旅した。参加者は、先生・野沢・寺阪・堀・梶川である。酒造家や神酒づくりの神社を尋ねるのが先生の関心事であった。鴨川の「望洋荘」と館山の「ホテル錦」に泊まる。私は宿で例会として、「一万石大名の城下」を報告した。

グレコ会の第1回は、49年1月26日であった。私の日記には、「3時、目黒でグレコ会。野間・中村・堀・寺阪・小生(他に野沢)。新しい海外の動向を評価・吸収せんとす。当面、次回までに文献のカード化とChorley ed.: *Directions in Geography* を分担して読むことにす。後、皆で焼肉屋へ」とある。グレコ会の名称は、Geography, REvolution, COntemporaryの頭を取った。先生はグレコ会にしようと冗談を言わ

れた。先生のメモに「楽しくやり、締めくくりをつける」とある。会では、次に、NAS-NRC: *The Science of Geography* (1965) と D. W. Harvey: *Explanation in Geography* (1969) を分担して読み、報告し合った。同年末、用意された論文リストに投票して、翻訳する論文を決めた。先生には、シェーファーとバートンの二論文を分担して頂いた。50年9月に埼玉大学の宿舍で中村・寺阪氏と合宿して、先生の訳文を直し、清書してお渡した。一人で添削していたら、とても許して頂けなかったであろう。8論文の訳と先生の「序」を一冊にしたのが、野間三郎訳編『空間の理論』（古今書院、51年9月）である。この第二集も計画されたが、未刊になった。

私は47年春からハゲット著『立地分析』の翻訳に取りかかっていた。当初は先生も私も、他の方に監訳者と共訳者を予定したが、結局、先生に監訳者になって頂いた。私は原稿用紙600余枚の訳文を3回書き変えたが、これも先生の指示である。49年夏に、私が翌年4月から名古屋の金城学院大学へ転勤する話が出てきたので、それが自ずと原稿の締切り期限となった。8月下旬に先生と八王子セミナーハウスで4日間の合宿をしたのも、集中的に原稿を進めるためである。翌年3月に原稿の全部を大明堂に渡して、都立大学を退職した。訳本は51年2月に出版された。先生の都立大学ご退官に間に合って幸いであった。先生はこの訳本をかなり多数の方に寄贈されたようである。6月19日付の手紙に、「大明堂より印税精算書がきています。ヤヤコシイので読んでいませんが、結論は赤字ではなく、480円残るとゆうて、小切手？が入っていました」と。この翻訳では先生に大変なご苦勞をおかけしたのである。

私は先生の揮毫をいくつか頂いた。それを披露しよう。

「守拙」…これは46年12月のものである。私の日記によれば、19日「野沢・土井と野間先生の還暦を祝い、伊豆・月ヶ瀬に招待する。葦山反射炉、江川邸、葦山資料館を見学。タクシーで月ヶ瀬旅館へ。寄鍋。小生は朝5時まで先生の揮毫の墨を磨る。20日朝8時起き、朝食を延長して12時頃までチビリチビリと飲む。酒？本、ビール？本、支払い33,500円。浄蓮寺滝へ行き、釣りをす。4人で成果、虹鱒1匹のみ。先生・野沢、川に落ち、水に漬かる。バスで三島へ出て、新幹線で帰る」と。この時、3人に頂いたのが、この色紙である。私は夜中に半紙に書かれた「欲望千里眺、更上一層楼」も頂戴した。

「自我作古」…これは私が50年4月に金城学院大学に転任したときに送別の書として下さった。4月12日付の手紙に「今日は筆墨をとり出してみました。色紙に、自我作古 と書きました。これは人真似をしない、自分で新しい道を切りひらく、という様な意味かと思えます」と。

「円き丘 幼稚園あり 蝶の舞ふ」…50年7月2日、先生は珠洲市の調査の帰りに私の家に来られた。私は金城学院の一戸建ての職員住宅に住み、3軒隣が息子の通う金城幼稚園であったから、環境が良いと思われたのであろう。この時、息子にオセロ・ゲームを下さり、小一時間それで息子と遊んで下さった。その夜、揮毫して頂いた私の表札は今も我が家の戸口を飾る。翌日は金城学院大学内をご案内し、名古屋大学に来講中の門村氏と3人で夕方5時から名古屋駅地下街の「河文」で会食をし、お別れした。

「ハゲットを 訳し終わりぬ 桜鯛」…先生監訳のハゲット『立地分析』は、51年2月に出版された。同年3月24日に伊豆・湯河原の「向島園」でグレコ会主催の先生の都立大学退官記念会が行われた。出席者は、先生、中村、寺阪、野沢、土井、堀、小林茂、小林光子、小生の9名である。食卓に鯛が出された。その時の先生の句である。

「老夫看尽人間事、欲向山僧学打包」…これは先生が福井大学を退職された53年の春に下さった色紙。「じんかん」と「だほう」の語に込められた先生の真意はついにお聞きできなかった。

幻の揮毫「笑而不答、心自閑」…私は金沢大学に移った58年の秋に胃潰瘍で2か月ほど入院した。その見舞いに考えておられた文句である。退院後の12月25日付の手紙に、「とうとう筆をとれませんでした。これから学年末も近づき、いよいよおいそがしい事でしょうが、横着に、図々しくやって下さい。土井君に会われた由、病院までやってこられたのですか。それでは一寸一杯というわけにもいかなかったでしょう」と書いてこられた。

私の上司そして学問と人生の師であられた先生のご冥福を祈りたい。

野間三郎先生との出会い

野澤秀樹(九州大学文学部)

私が野間先生に親しく接するようになったのは、先生が金沢大学文学部から東京都立大学理学部に赴任された昭和43年4月以降のことである。もちろんそれまでも学会などで、時折先生のお姿を拝見することがあったが、われわれ学生にとっては、恐い、近寄り難い先生として通っていた。先生が保柳睦美先生のご後任として地理学講座の教授として都立大学の地理学教室に赴任されたとき、私は新設された地誌学講座の助手に配置替えになったため、直接先生の助手を務めることはなかった。また、私はその年の9月にフランスに留学したこともあって、先生のお近くにあつて多くの教えを受けることになったのはそれから2年後のことである。

私が帰国した頃、地誌学講座では戸谷洋教授を中心に「地域区分論」のゼミが行われていた。私はそこでG. Bertrandの「Géosystème論」やR. Brunetの「Quartiers論」などを紹介したように思う。またその頃、地誌学講座のあった目黒校舎の実習室で、野間先生を中心とした研究会がもたれるようになったが、地誌学講座のゼミと野間先生の研究会がダブってしまつてその二つの関係がはっきりしない。参加者は重なっている場合が多かつたし、研究会の話題もゼミのテーマを引きついでいたように思う。『地学雑誌』に発表された「地域のシステムに関する諸外国の研究」がその時の成果である。

私の留学中、野間先生がどのような研究会をもつておられたか、どなたかが触れられると思うが、昭和45年の秋から上記の研究会をはじめ、先生はさまざまなテーマで、会の名称を替えながら研究会を主宰して来られた。先生はまさに組織づくりの名人と言ってよい。講座を超え、大学を超えて、さまざまなひとびとに声をかけられた。研究会にはアルコールが付くのが常であつたが、お酒は各人のペースで飲むのが本道であるときれ、研究会に「独酌会」という名称が付いたこともあつた。話題は地理学史から現代地理学、さらに地理学の実践・応用まで幅広く語られ、初期の頃にはブラッシュを振つて「ブラシ会」と呼ばれたこともある。しかし何と言つても現代地理学の話題が取上げられたことを特筆しておかなければならないだろう。どなたかが書かれると思うが、今日まで続いている会の名称『GRECO』のCOはContemporaryの意味である。当時わが国は理論・計量地理学が盛んな時代で、先生はこれらの地理学に大変興味をもつておられた。大学院のゼミでクリスターラーの『南ドイツの中心地』をテキストに撰ばれたり、梶川氏とハゲットの『立地分析』を訳したりしておられる。先生は理論をただ机上のものとするのではなく、実際への適用・応用を考えておられたことを忘れることはできない。それらの成果は地方生活圏の道路計画などにみることができる。地理学史家としての先生が常に現代地理学に関心をもたれ、その応用にも腐心されていたことを銘記しておかなければならない。地理学の古典をしっかりとおさえておけば、どのような新しい地理学の問題が現れても驚くことはない、とおっしゃっていたことが印象的である。

先生のご研究が近代地理学の成立に関するもっとも根源的なところにあつたことが、いまさらのように思い起こされるのである。先生はフンボルト、リッター、さらにマルテ、リヒトホーフェンなどの成立期の地理学だけでなく、それにつづくラッツェル、ヘットナー、シュリューターなどの制度化後の地理学史をまとめられる計画をされていたが、ついに日の目をみることはなかった。あの該博な知識と想像力が先生と共に失われてしまったことが、なんとも残念でならない。

野間先生との出会いには、私にとって、奇しき因縁があつたように思われる。学生時代から学史、方法論に関心のあつた私にとって、近寄り難い存在であつた先生と、実質的には僅か3年足らずであつたとはいえ、同じ教室にご一緒できたことは誠に幸いなことであつた。学生時代に抱いていた印象とは異なり、先生は大変気さくな方であつた。先生は“科学史”としての地理学史を旨とされ、“思想史”として研究することに批判的であつた。現在、地理学史研究は世界的に科学史の一環としての研究が進んでいるが、いまその科学史自体の方法論も大きく変化している。また、地理学史研究は地理学の中の一分野としての位

置を占めつつあり、いままさに現代地理学の方法論を見据えた学史研究が重きを増してきている。野間先生はそのことを見通しておられたのであろう。

野間先生のご趣味に囲碁のあることはよく知られているが、書、篆刻、俳句などにおいても一家をなしておられた。調査先でお酒がはいて気分の良い時など色紙を書いてくださったが、私にとって何と云っても忘れられないのは九州に赴任する時下さった俳句である。

『土筆摘む 空明るきに 書もちて 冬青』

グレコ会と野間先生

寺 阪 昭 信 (流通経済大学経済学部)

もう20年以上も前のことであり、余り記憶がはっきりしないが、学生時代から学説史で高名な野間先生のお名前はよく知っていたのであるが、先生に初めてお会いしたのは、私が埼玉大学に助手として赴任してまもなくのことであった。それは先生が都立大学にこられて研究会プラス飲み会をするというので、同級の野沢君が助手をしていて声をかけてくれたのであった。先生が学外の者にまで呼びかけたきっかけは知る由もないが、同窓ということが一つのつながりであったことは事実であろう。また当時、野沢君らとジョルジュの *Géographie active* 「行動の科学としての地理学」を翻訳中であったので多少とも地理学方法論について考えていた時期であったのも、その誘いに快諾した理由であった。大学院時代には専らフランス地理学の系統を勉強していたから、酒を飲みながらラッツェルを始めずいぶん未知の世界を案内していただいたが、初めのうちは主に先生の取り上げられた話題は別世界のこのように感じられたように記憶している。

その研究会が毎月1回開かれ、メンバーが変わりながらも、現在まで形が変わってもグレコ会として継続しているのは先生が敷かれた土壌の豊かさということになるか。何時の頃からか、本格的な勉強会となり、ついには本を出版するにまでいった。そのいきさつはすでにいくつかの記録にある通りである。普通の研究会はただ議論したままで終えてしまいがちであり、まして酒が入ってからの議論において無責任になりがちである。ところが野間先生の会では酒が入ってからの話の方が本論なのである。そこがこの研究会のユニークなところであった。その積み重ねがまとめられて出版されることとなった。

その後の私自身の研究のあり方もまた研究者としての道筋もこの研究会、ないしはこの会を当時主宰しておられた先生を抜きにしては考えられないほど大きな影響を受けている。うまく言葉で表現できないが、それほど魅力的な集まりであったといえよう。

ところで、『空間の理論』の完成は結局のところ先生が都立大学を退官されてからになるが、事実上は先生の都立大学における最後のお仕事ということになる。金沢大学から都立大学に移られて何を求められていたかは今となっては知る由もないが、文学部から理学部への異動は想像以上に違和感があったのではないであろうか。地理学史ないし学説史の研究を地理学教室に定着させることの困難さであろう。それを埋める試みの一つが学外にも広げた研究会であったのではなかろうかと今では推測している。これは梶川君との共同の仕事であるハゲットの訳出の延長上にあるのだが、それ以前の先生ご自身の研究との断絶を感じないでもない。ドイツ地理学からアメリカ地理学へ、これは日本の地理学の流れそのものである。しかし、その断絶を埋めたのは、先生の手書された序文である「新しい地理学あるいは地理学の革命について」およびシェーファーとバートン論文の解題に見事に結実されている。先生の学識の重みを感じさせるものである。1960年代後半に *Models in Geography* や *Explanation in Geography* などの刺激的な書物が次々と出版され、それらを理解吸収しようとつとめていた時期と研究会の活動とがうまく重なっていたともいえる。特に、ハーヴェイの後者の書物は随分長い時間をかけて全員で読んだ。一人では理解しえないことがこの会で議論されることによって分かったことも多かった。その後、リーディングスが日本の学界にないことが話題になったことがあった。それを作るという企画がもちあがり、引用の多い代表的な文献を選ぶことも大きな論題であった。随分ながい議論があった。今ではそれもすばらしい思い出になる。

しかしながら、明治生まれの古典的なタイプの研究者に属し、かつまたフィールドよりも文献学派であり、ドイツ語の堪能な先生としては翻訳、とくに英語文献についてはあまり仕事として評価されておられなかったのではないかと思われ、初めはさほど気乗りのしないご様子であった。それをある意味では無理矢理にこの作業に引き込み、一緒に何度かの合宿にまでおつき合いさせてしまったところにこの会の良さがあったと思っている。

この書は研究会の外縁部（その当時埼玉大学）にいた小生が深く関わることになってしまった。小生にとってはオーソドックスな書物の作り方の基本を表紙のデザインからはじめて活字の組み方まで、古今書院の田中さんから勉強させてもらった思い出深い書物でもある。その意味ではこの書はグレコ会の最も活動の活発な時期の産物であり、酒と議論と汗の産物であったといえようか。

さてその後、先生が都立大学を去られてから一年後に偶然に同じ職場に勤めるようになって、先生の苦労されたことの一部を身にしみて感じるようになった。大げさに推測すれば対外的に名前の通った都立大学への期待に対する挫折感といえようか。先生は直接的にはそのようにお話にはならなかったが、先生の著名さをもってしても研究上の後継者をそこで育てられなかったことに現れている、と見なせる。それは簡単に言えば理学部にいかに人文地理を定着させるかということであり、このことは今までのところまだ成功しているとはいえない。せっかく大先生を迎えながらそれに応える受け皿が教室に用意されていなかったといえよう。これは文学部的な地理学と理学部的な地理学との間の溝の深さを示す一例でもあった。そのなかにあってグレコ会は、先生にとって唯一の救いの場であったのではなかろうか。

重なる偶然

山口 守 人 (熊本大学文学部)

大雪のため、始発駅から大幅に遅れていた夜行列車に苛立ちながら乗り込んだのが、21時を過ぎていたように思われる。旅立ちを止めた人も多かったのであろうか、車内は思いの外空いており、手足が伸ばし易い座席を見つけ、荷を置く。何時ものことながら、夜食を膝に乗せ、本読み体勢に入った。どれほどの時間が過ぎた頃であろうか、大遅延に遭い、駅前の書店で時間潰しをした際に購入した黄色の帯の付いた書籍のことを突然思い出す。著者野間三郎先生のお名前は、『地理学のあゆみ』で既に存じ上げていたが、本書の内容は小生にとっては全くの新世界で、分からざるままに読み耽っていた。

「地理に関心あられるのですか。」

突如、筋向いに座っている人から声を掛けられる。驚いている小生に、その人は、いたずらっぽく、

「その著者は、あなたの座席から1つおいて前にいますよ。いま、寝てますがねえ。」

慌てて、奥付を見ながら、状況判断をする。

「済みません、驚かせて。私、金大文学部で地理を専攻している学生です。野間先生に連れられて、野外巡検に行くところです。どうぞ、読み続けて下さい。」

自己紹介で返答したのち、眼を活字に当てたが、興奮の余り、活字が追えない。座席後方にある近い便所をわざわざ避けて、前方の車両の向うの便所に赴き、帰途、先生の寝顔を観察する。心持ち首を右前に曲げ、口を少し開けた姿で軽やかな寝息をたてておられた。いずれ終着駅で目覚めた尊顔を拝せるだろうと思ひ込み、微睡んだつもりがまさに熟睡。車内放送で目覚めたときには、一行の姿は既になし。いずれの駅で下車されたものでしょうか。その後、都立大に移られたことも知らず、思いがけざる場所で、初めて言葉を交わすことになり、その感激は今以って忘れない。その場所とは、石田龍次郎先生邸である。

当時、小生は、伝統工業、在来工業等を含む中小零細工業に関心があり、これを社会地理学的手法で分析することを模索していた。「工業化委員会」でご指導を仰ぐ機会をえ、またご自宅近くの某大への非常勤講師をご紹介下さるほか、何かとお引き立て戴いていたことから、時折、石田先生宅をお訪ねしていた。

確かあの時は、フィールド調査の帰途、立ち寄ったのだと思います。話題の中心が外部分業に潜む非経済性の存在意義についてであったことは、今日まで解決できずにいる問題であるだけに記憶に残っている。議論が堂々巡りになり始めた頃、客の到来が告げられ、腰を浮かせたところ、

「そこに座っていなさい。」

といいおき、出迎えに行かれる。約束された来客であることは、近づく会話から窺い知れる。今更のように無断の訪問を恥じながら、身を固くする。襖があき、早々に

「こちら、山口君。教育大の助手をしています。お見知りおきを…。」

「野間です。教育大ですか。あそこには沢山の洋雑誌があるそうですねえ。一度、機会を作って、訪問したく思っています。」

「いや、必要なものがあれば、彼に電話し、検索してもらったら、如何ですか。何処でもそうでしょうけれども、疎開等々で古い書籍ほど見付け難いですから。」

「どうぞ、仰せ付け下さい。」

と言うのが精一杯、緊張しているのが自分でも良く分かる。

「ところで、今日、伺いましたのは、電話でお話し致しましたように、日本地理学会五十年史のことですが、ご存知のように東京のことはサッパリ分りませんのですわあ。とくに戦前のことについては全くといっていいほどです。ここに年表を作って参りました。これに沿って、当時の学会活動の動向を教えて戴きたいのですが…。まず、柳条溝事件、昭和6年9月ですが、その頃あたりから…」

「電話戴いてから、当時の日記やその他の小冊子などをもとにメモを作ってみました。ぼく自身読み返

してみても脈絡のつかないところもあって、正確さを欠きますが…。話し合っているうちに思い出すこともあるかも知れないし…。そうそう、山口君、先程の話の時に、工場主とのインタビューを再生して聞かせてくれたが、空きのテープまだありますか。思いつくまま、話すので録音しておいてくれると助かるが、先生は如何でしょうか。」

「それは有難い、私、聞いた話、すぐ忘れるし、メモ取るのも遅いので、助かりますわあ。是非ともお願い致したい。厚かましきのついでと言って何んですが、再録テープも頂戴したいのです。山口先生、えらいすませんなあ。ほかに予定もありませんように。」

「評論が大正13年に発行されたのですが、柳条溝事件の頃までは、なお内輪的な性格が強かったというべきでしょう。今でいう規約も十分に整っていたとはいえないし…。ただ、純粋な学術雑誌としての性格は確立していたと思うなあ。この点、後の地球学団の機関誌とは多少、趣を異にしていたといえるでしょう。」

「この頃だと思いますが、奈良、大阪、信州、東京などに数は少なくないが、地方の地理学会がありましたか、これらとのかかわりはありましたのでしょうか。」

「会としてはなかったが、会員が検定委員として個人的にかかわられていたかも知れません。当時、地方では中学校の先生が地理教材研究のために学会を作っておられ、その活動を活性化するために検定講習を催していたようです。」

「話は急にとびますが、東亜地理学特別研究委員会、資源科学連盟地理学部会というものがあったと聞きましたか、これらと日本地理学会との関係は、どないな関係にあったのでしょうか。」

「先きの方は、われわれが“学会の2.26事件”と称しているもので、若手研究者が昭和14年3月に日本地理学会の活動機関の一つとして特別に設けたものです。しかし、実質的な活動はしなかったように思います。後の資源科学連盟地理学部会の方は、探険地理学会、陸水学会、そして日本地理学会が名を連らね、昭和16年12月に設けられたものです。昭和17年の山西探険学術調査がその主な事業であったように思うが、時局から、熱河探険隊のような学術的成果をあげられなかったようだねえ。この後に実施されたニューギニア探険学術調査はもっと厳しい時局下でなされた…」

「これらの特別委員会・部会の活動と地政学との関連はあったのでしょうか。」

「知り得る限り、全くなかったと思う。ご存知の通り、地政学の内容が関西と関東とは異なっていたでしょう。ぼく流に解釈すれば、関西の方々のものは皇道会の唱えた日本主義を思想的なバックボーンにしていただけに世間に影響も与えたようだが、関東の方々のものはチェレンヤハウスホッファーの翻訳であったでしょう。」

上記のような問答は、約150分に亘って行なわれ、雑談形式の中に、日本の地理学の歩みの一端を垣間見たような気がした。

「つまらん話で、時間を潰させましたなあ。吉祥寺、わて初めてですよ。一寸、休んで帰りましょ。実は、わて、東京へ来てから探しているものがあるので、石田先生から紹介された時からお願いしようとして…。ラウテンザッハの論文で、ミュンヘン地理の第三号です。」

といいながら、割箸の袋の裏に“Über die Begriff, Typus und Individuum in der geographischen Forschung.”と綴られた。その真摯なお姿に学究人の執念を思い知らされました。

後日、テープを届けに都立大学の研究室を訪れ、グレコの存在を知らされ、誘いを受けたが、その半年ほど前から変調を来していた体調の具合がなお一層おかしくなり、通院頻度が増えるに従って、続けて参加する気力も失せていった。偶に出席した研究会の議論では、伝統地理学を踏まえた「革新の息吹き」が窺え、新鮮さとともに遣気呼び戻す機会であった。不調のため、研究会後の放談会を失礼して帰る小生に、

「具合はどうか。漢方薬も併用してみたらどうか」

と細やかな心遣いを戴いたことを昨日のように思い出します。

怠慢から、ご指導に何ら報いることなく、日々を過ごしているうちに、鬼籍に入ってしまったわれ、誠に残念至極でなりません。ここに改めてご冥福をお祈り致す次第です。

合掌

野間三郎先生の思い出

山 野 正 彦 (大阪市立大学文学部)

私は野間先生に教室で習ったことはありませんが、地理学史・方法論を専攻する関係から、直接・間接に先生から受けた学恩には、かけがえのないものがあります。

初めて野間先生にお会いしたのは(厳密にいうと対面しただけで、お話ししたわけではないのですが)、1965年10月のことでした。この年、先生は私の在学していた大阪市立大学に、大学院の「地理学史研究演習」担当の非常勤講師として、集中講義においでになりました。当時、先生は金沢大学にお勤めで、2年前の1963年に主著『近代地理学の潮流』を刊行され、その専門のドイツ地理学史研究の御業績により、一段と学界にその御令名が轟いておりました。私は当時まだ教養課程の2回生で、すでに地理学の専門課程の授業には出ていましたが、大学院の授業に出ることは憚られました。しかし授業に出た先輩の院生の間からは、野間先生は偉い先生らしいが地理学史の話よりは、基の話が多いとか、お酒を相当たしなまれるとかいったような愉快な噂が洩れ聞こえてきました。私が『近代地理学の潮流』を購入して(丁度2刷が出ていました)読んでみようという気を起こしたのも、生態学に関心があったということに加えて、おそらく、こういった雰囲気の影響したものと思われまふ。一読してみてこの本の学問的かおりと先生の格調高い文体に大きな感銘を受けました。しかし内容は難解で、その後何年もたつてやっと取り上げられている問題の意義が理解できるという部分も幾つかありました。あとでわかったのですが、野間先生はこの年の3月から3ヶ月間、アメリカ、イギリス、ドイツへと御出張になり、新しい経験を心得て帰られた矢先のこと、張り切っておられたのでした。アメリカで高名なハーツホーン教授に会われたときには、「相手は私が著書のなかで自分のことを批判しているのを知っていたらしくて、ずいぶん苦い顔をしていましたよ」などと後日、語っておられました。

まもなく1967年に4回生になった私は、向う見ずにも、「A. v. フンボルトの比較地理学の方法」をテーマに卒論を書きたいという考えを起し、御指導頂いていた岩田慶治先生の御示唆と御紹介で、金沢に野間先生をお訪ねすることになりました。8月の暑いある日、急行「立山」で大阪を朝出発し、官舎に住む先生のもとにうかがいました。すると先生は直ちに私を兼六園のなかの池の畔にあった茶店に連れて下さるのです。ビールと名物のゴリの佃煮が出て、「金沢の名物でゴりに優るものはない」だとか、「xx先生はどうしておられますか、あれは偉い方だ」とか、グラスを傾けながら四方山話をなさるのです。そのうちに「あなた何で地理学史などをやりたいのですか、地理学史などを専攻してはメシが食べません」とか、「孫引きはいかん、必ず原典に遡るべきです。それが実行できますか」とかいろいろな御忠告を聞かされるはめになり、ほろ酔い加減も手伝ってか、とうとうこちらの用意してきた質問に入ることもできず、まことに面喰らいました。やがて大学の研究室を見せて頂き、あらかじめお願いしてあった、E. プレーヴェの本(先生はハーツホーンは呼び捨てにしていたのに、プレーヴェはプレーヴェ先生とっておられました)のマイクロコピーを土産に帰ることになりました。まだ何か尋ねたような素振りの私をお察しになったのかどうか、先生はタクシーで金沢駅までわざわざお送り下さり、列車の出るまで改札口のところでお話することができました。私がH. de Terraのフンボルトの伝記について話を向けたとき、先生は「その本は何色でしたか、本は色で覚えるのです」といわれたのは私が本当にそれを読んでいるのかどうか確かめられたのでしょうか?ともあれ先生の第一印象は、ややペシミスティックな気味のある、口は皮肉めいているが、しかし親切な方だということでした。また先生が上方のアクセントでお話になる口調にも親しみを感しました。私が先生の「苦言?」にもかかわらず、地理学史の研究に従うつもりであったことはいまでもありません。もっともこのことは、一方で並行して、実際のフィールド調査の経験を積もうとする機縁になりました。

大阪に帰って、お礼状を出しましたら、折り返し「地理学卒業論文の書き方」という、先生が金沢大の

学生のために口述された内容をプリントした11ページの小冊子を頂きました。これは「論文は書きたいことがなければ書くことができない」「論文も小説と同じで、自分の作品であるから、自分にしか出来ないところがなければならない。しかし、それが自分にしか通用しないのではいけない。さらに一段と進むと、そのような自分の特殊の考え方と、調査あるいは研究の結果がその学問の今日の体系のなかに位置づけられるよう工夫されねばならない」などという記述が示すように、その内容からして卒論どころか、専門研究者の論文執筆の心得としても価値あるものだと思います。座右において折々に参照しています。

先生が東京都立大学へお移りになってからも、折りに触れていろいろ御教示頂きました。1970年11月25日午後、深沢の都立大の研究室をお訪ねした日は、例の三島由紀夫が割腹自殺した日でした。ニュースを知らない私に向かって、先生は少し興奮気味に夕刊の1面に載った、三島の首がうつすら写っている写真を示されて、「このような写真を新聞に載せて良いのでしょうか、今までにはなかったことです」とおっしゃられたことを覚えています。この日夕方から今の「グレコ会」の前身でしょうか、「ブラーシュ会」という野間先生を中心にした地理学史に関心ある若手の集まる会があり、私はその頃、ラッツェルの空間論に関する修士論文を執筆していましたので、その内容を話すようにというご指示がありました。この日ももちろん通例どおり、あとで近くの飲み屋に席が用意され、さらに東横線の高架下のようなところで2次会となりました。話題の中心は当時ようやくわが国にも刺激が到来した「地理学の概念革命」についてでした。話が弾んで、私はどうとう新幹線の最終に乗りそびれ、ようやく横浜駅で東海道線下り最終の普通大垣行きに間に合ったことを記憶しています。この時はあとで葉書を下さり、「もっと自分独自の考えを示すか、資料を豊富にして話の筋道の展開に重みをつけるかしなければなりません」という厳しい助言を頂いたことでした。私の話があまりにも先生をはじめ他人の考えの受け売りで、自分の解釈が不足しているという意味であったものと思われまふ。この点はその後も私の常に心に銘ずるところとなりました。さきにも触れたように先生はきわめてオリジナリティーを尊ばれる方でした。このことは先生が忘れられた地理学者マルテに関心を持たれたことからわかります。リヒトホーフェンがマルテのアイデアを注釈なしに自分の見解のなかで用いたことに対して注意を促されたわけですが、『近代地理学の潮流』のなかで、「*Kosmos* がフンボルトの地理学を代表している本ではない。植物地理学の業績を取り上げなければならない」とされているのも同様です。先生の口癖は「あの人の考えは本物ですな。あれは偽物（借り物）ですな」ということでした。

その後も、グレコ会や地理思想の科研グループの研究会などでたびたび御一緒に、親しくお話させていただく機会がありましたし、お送りした拙稿の別刷に対しても、いつも御丁寧に簡潔なコメントを頂戴しました。しかし近ごろそのコメントも次第に先生独特の「苦言？」が影をひそめはじめ、同時に学会でもお姿を拝見することがなくなってきましたので、御健康のことを案じておりました矢先、御病床に伏せておられるとの知らせを受け、さらに追いかけるように御逝去の報に接し驚きました。先生の頭の中にはまだまだ世に広く伝えられるべきアイデアが蓄えられたままであったことを惜みます。また個人的には、先生についての記憶は私の学究生活の節目に直結していると申しても過言ではありませんので、感謝の気持ちでいっぱいです。

先生の告別式で御令弟が御挨拶のなかで、「口の不調法な兄でしたが、私にとってはやさしい兄でした」とおっしゃって声をつまらせておられました。先生についての私の印象もまったく同様です。先生がこれからも西方世界からわれわれを暖かく見守ってくださることを念じております。

野間先生の授業

稲田道彦(香川大学教育学部)

1975年、野間先生の都立大学における最後の年が私が都立大学大学院に入学した年でした。直接に教えていただいたのはこの1年間のみでした。しかし私にとっては、授業やグレコの活動を通じ、野間先生と接する中で学問のよろこびを教えてもらった濃密な1年でした。

先生から教えをうけた授業は、学部向けの「地理学史」と大学院向けの「人文地理学特論」「人文地理学ゼミナール」でした。その他に先生のお話を聞くことができたのは、図書室で毎週開かれる「雑誌会」という新着雑誌の紹介の会と、月に1回程度開かれるグレコ会でした。私が学問として地理学へ引き込まれていったグレコ会には思い出がたくさんあります。しかし、ここでは先生とのつながりのうちでも特に私に新鮮であった授業について述べようと思います。

「地理学史」では先生が作られたプリントが配られます。そのプリントは構造図とも言うべきもので、真ん中にそのプリントの主題となる用語が書かれ、太線の丸や四角で囲まれています。それからまわりに関係する用語を配置してあります。用語は太い線や細い線で囲み、それぞれの用語の重要性を表しています。それから用語間を実線や点線の矢印でつなぎ、用語どうしが関係をもつことが示されています。幾つもの線によって、全体としてはその時代の地理学の興味や問題、関心がどこにあり、何と関連していたかがプリントに表現されています。そのプリントを授業の前に人数分コピーするのですが、それが私の仕事になり、好奇心にかられながら機械に向かったものです。大体1枚のプリントで、1時間の授業が終了しました。先生は用語と用語の間を授業の中で言葉でつないで行くのですが、手元にはほとんど資料をもたず次から次へとさまざまな話を繰り出されます。哲学や生物学、科学や人類の発明・発見、その時代の知識人の関心、人の伝記、各地の知識といった、それまで全く縁がないと思っていたことまでが先生のお話でつながっていきます。話す前に息を吸い込まれて空気をため、そしてちょっと間をとってゆっくりと一語一語を吟味しながらでてくる言葉を聞きのがすまい、文字として私のノートに残すことなく定着させようと思ったものでした。最後の方ではすっかりこの授業に魅了されてしまい、先生の言葉が私の知的興味を喚起するようなよろこびを感じたものです。私としては先生の掌をさすような授業に満足しながらも、一方でスピードアップしてたくさんのことを教えてもらいたいと思いました。しかし、ゆっくりしたスピードで授業は進行しました。先生のプリントはさみにはまだプリントがあったのですが、半期の授業では、中世が終わり近代地理学の開花を習ったあたりで終わりました。

私たちと同時代の地理学の研究を先生が学史としてどのように位置づけておられたのか、それはこの授業では聞けませんでした。しかし雑誌会では気楽な雑誌紹介の会話の中で、先生の学問観をうかがうことができました。地理学研究の発展(その時代の多くの研究者が興味・関心をもって研究していることから、だから当然成果が集中している領域)は時間軸に沿って螺旋のような発展をしていて、地誌に代表されるような地域の特徴あふれる個別的な知識が大事にされる分野と、当時発展期にあつて研究論文が次々と発表された計量地理学のような論理追求的な研究のもう一つの分野とがあつて、それぞれの分野の上を順次円軌道を描きながら発展しているというのでした。両分野はお互いの存在を認め、自分たちの方向を洗練させながら発展しているというようなモデルでした。それは我々がその大きな時代の流れを縦に切った同時代という断面の上で研究していて、どちらかの方に学問の関心という重心を移しながら研究しているんだというようなモデルでした。何しろ私はこのような会話を今まで一切聞いたことがありませんでしたので、このような理解でよかったのかどうかは未だに疑問ですが、これが当時の私の、先生の話の理解でした。「いちばん時代遅れの研究をしているように見える人が、時代の変化の中でいつのまにか次の時代の最先端の研究をしていることになるんだ。」こんな風なことを言われたことを思い出します。だから私も、自分の興味にしたがう研究を続けることが肝心だと心に刻んだものでした。

ゼミの授業も先生らしいものでした。私と小林光子さんが受講生でした。ゼミで最初に紹介された本はプラトンの『饗宴』でした。何でこの本が地理なのかといふかしく思いながら手にとったものでした。この本で先生は学問の論理の作られ方、学問の議論の仕方を学ぶことを希望されていました。学問の産婆術が授業なのだ、いや我々のこのゼミなのだと教えてもらいました。大学院の地理のゼミの最初がこれですから、少しびっくりしましたが、私はますます先生の世界に引き込まれていきました。D1の小林さんは私が聞いたことのない学術用語を次から次へと話します。時に野間先生が「小林さん、それはどういうことなんですか。」とか「こういうことと違いますか。」とやわらかい京都弁でお聞きになられます。本当にわからないことはわからないという態度で、ごく自然でした。そうか先生にもわからないことがあるのかという安心感と共に、わからないことは聞けばいいのだという、ごく当たり前のことに強く感心しました。私の今までの世界では、私の努力が不足しているからわからないのだ、だからわからないことは恥ずかしいことだと思っていました。あとでわからないところをひそかに勉強しようというのがそれまでの私の態度でした。多分このことと関連するのでしょう。先生がゼミで次のようにおっしゃいました。「東洋の学問のやりかたは偉い師匠がいて、弟子はその先生の学問をひそかに盗み学ぶというのが伝統だ。だから授業は先生が一斉に講義するのを学生がうけたまわるといふ形式をとるのだ。しかし西洋の学問の伝統は、先生も弟子も同じ場で議論をおこない、お互い議論を通じてそれぞれ自分の学問・知識を高めるのだ。先の『饗宴』で、学問が産婆術というのもこのことで、新しい知識という子供を生むのを、議論という場でお互いが協力しておこなうのだ。」

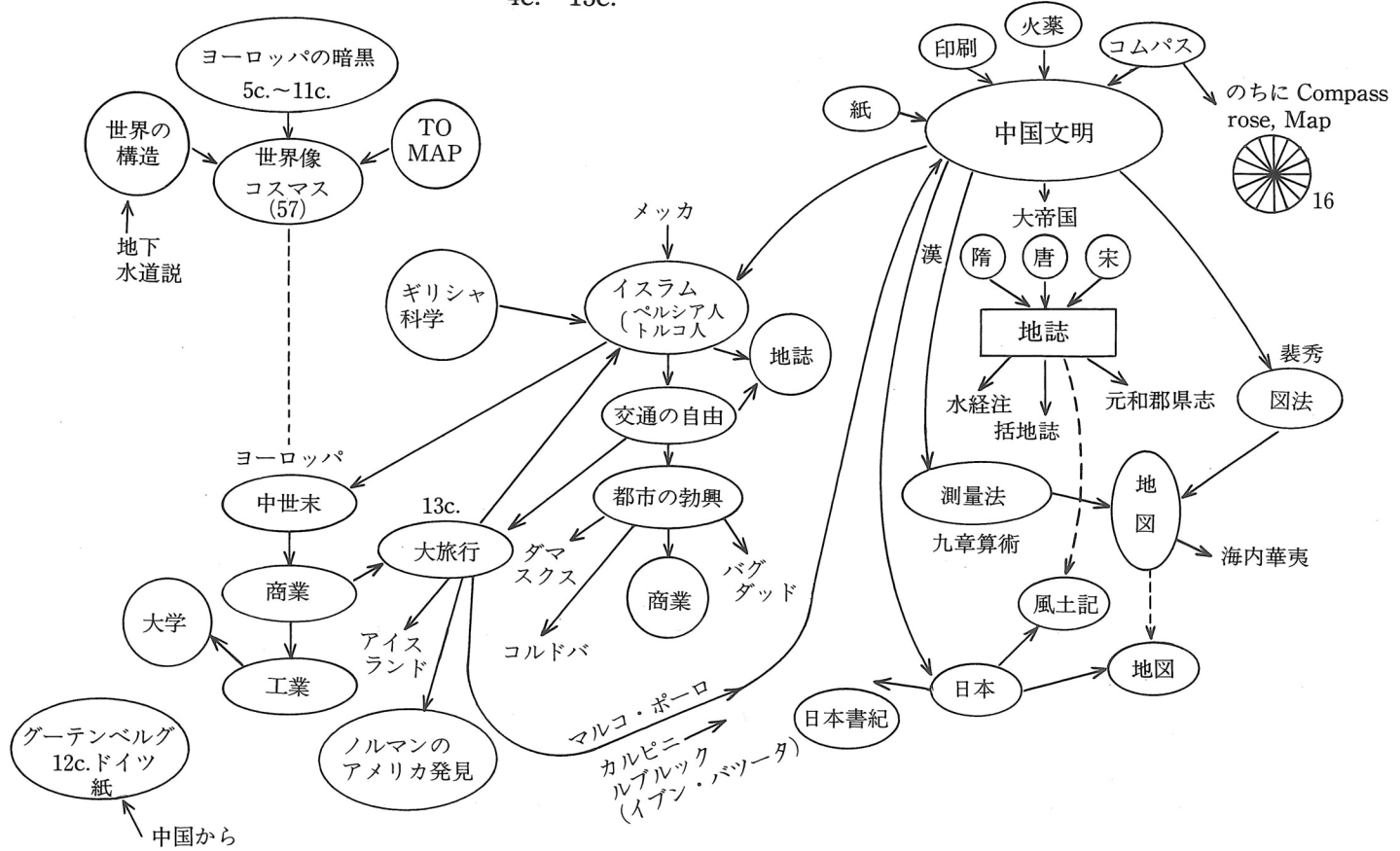
先生とゼミでお話をしていくうちに、今まで私が身につけていた考えが少しずつ変わっていきました。それまでの私にとって、「先生」は、孤高の存在でした。しかし野間先生は違いました。私の学問観もこの時期に形成され始めたのだと今になって思います。「今までの知識を、自分の理解の枠組みに置き換えてそして自分が理解するのが、自分のおこなう学問なんだ。」という、この野間先生の自然体ともいべき学問の姿勢には大きく感化されました。大学院のゼミでは、当時の私の専攻が農業地理ということもあり、私のために課題を設定して下さり、Whittleseyの農業地域区分の論理的基盤を学んだりしました。しかし私にとって、このゼミの最大の成果は野間先生と出会って、学問をするということと自分が研究するということとの関係を考えさせられたことでした。学問の中で、自分が知るとか自分が考えるという行為は本当に心地よくて楽しい努力なのだということを教えていただきました。

「人文地理学特論」は二つのテーマによって構成されていました。一つはシステムという「全体」と「個体」の間をつないでいる関係を考えようとするものでした。特にOrderの議論はいろいろな立場からの考察を紹介していただきました。例えば流域というような一つの系を考えることにより全体のもつ総合性に迫ろうという議論に私はひかれました。二つめには分類という思想についてでした。自然分類から出発し、人為分類である地域区分まで議論は進みました。境界の問題、オーダー、図書館の十進分類まで含めて、分類が科学の思想の一つの根元に位置することを教えていただきました。分類することは究極の目的ではなく、分類したものを基本単位としてある構造を構成するのだとおっしゃいました。先生の講義を聞くうちに、地域区分も分類なのだから、分類することによってランドシャフトの基礎単位を抽出し、それを総合体ともいべき地誌につなげていき、そこに分類間のつながりである構造を見よう、ということを考えるようになりました。この授業でもそのほかのいろいろなことを教えていただきました。情報収集の仕方、カードによる情報整理の仕方、英文の訳し方のコツ、ひょうひょうとした先生のお話ほどこをとっても私には魅力でした。

先生に教えていただいたことが、当時の私に十分に理解できたとは決して思えません。しかし、現在の私の考え方の基礎はこの1年間で作られたといえます。野間先生との出会いなしには決して今の自分を築くことができなかつたように思います。本当に大きな恵みを私は野間先生から受けたものだと心から感謝しております。

中世の地理学 (56-70)

4c.~13c.



注：この図は、手描きの配布資料のコピーから作成したものであり、判読不明な箇所は一部省略してある。

野間先生の思い出より

小林光子

野間先生には、地理学を通じて学問のもつロマンを教わったと思う。「指導教官」でなかったにもかかわらず、適度の距離を保ちながらも絶妙の間合いで見守って下さった。

先生とは知らずに初めてお目にかかったのが、1971年秋、都立大大学院の修士課程入試の面接のときである。順番よりも早く会場の研究室に入ってしまったところ、「元気があってよろしい」とおっしゃった。眼鏡の奥の光の鋭い方、との印象があった。2度目は、入学と同時の丸1年の休学の後、復学してからだった。事情があって無礼を承知の休学だったが、「あなた、おうちの方ともめごとをおこしてたそうですね」と言われただけだった。このひとことで、少しは自分を客観的に見ることができ、ありがたかった。

だが研究は順調には進まない。指導教官の渡辺良雄先生がおっしゃるオープンキョウすら、筆者には足りなさすぎた。だいいち、計量革命なるものがおこる前の地理学史についてあまりにも無知であったから、理論計量地理学に関する論文の受け売りだけでは、渡辺先生から「抽象とは？」さらに「理論の存在意義」を問い質されると返答に困った。その上、地理学研究をやめようかと悩まれたご経験を話されたり、誰に對してでも誤りは誤りとして指摘できねばならないという具合に学問する態度に厳しさを要求なさる。筆者が意気消沈すると、「たまには野間先生の所へ行って慰めてもらったら？」とまで言って下さった。このご指導と、中野尊正先生の非常にのびやかなお人柄そのままのご教示に恵まれて、博士課程に進めることになったのである。

こうした状況下の筆者を、末席の客をもまず視界に入れておいて漸し始めるといふ故林家彦六師匠よろしく導いて下さったのが野間先生である。あと1年で福井大へ移られることになっていたが、世情にうとい筆者の進学にあたって、ずいぶんご心配下さった。

その頃の先生は、土井重彦氏によれば、氏が学ばれた頃と比較にならぬほどおとなしくなられているとのことだったがとんでもない。慰められるどころかよく叱られた。梶川先生と、P. Haggett(1969)の*Locational Analysis*を訳出される一方で、地域のシステムの研究の展望を、門村・中村・野沢・堀諸先生方と共に発表され(『地学雑誌』(1974))、雑誌会にも張り切って臨まれた。この会は、新着の洋雑誌を分担して論文を紹介しあう、紅茶に気付け薬とおかき等の付いた、野間先生中心に中村・堀・梶川先生の集まる週ごとの勉強会だった。筆者は上述の訳稿の浄書を一部分お手伝いさせていただいたことがあってか、自然にそのメンバーに加えられていた。後に、「野間研」の発展ともいべき Greco Society が発足し、New Geography の勉強もしていくことになる。

だが、地域のシステムの勉強の成果を共有しておられる先生方と、筆者との間には、地理学へのこだわりや強さ並びに研究の蓄積の点で歴然たる差があった。

この世への執着から自らを解き放って逝くときを、全力で乗り越えられた先生だが、それに優るとも劣らぬエネルギーを地理学研究にふりむけておられた頃を彷彿させる文章に出会うたびに、なつかしくなる。「有能な青年地理学徒野間三郎君」という小牧先生の紹介、『近代地理学の潮流』を執筆時の「なにしろ夢中でした」との述懐…。その様子をまぢかに見せつけられたのは、雑誌会の席であった。思考するに、先生のお悩みは深かったのではないか。本をつぎつぎに書かれていた1960年頃でも、文献検索情報網の発達や複写機の普及など無理な注文であったであろう。とりわけ学史研究にとって厳しい現実が想像できる。一度、探しておられる文献のメモを渡されたことがあるが、筆者には故村関氏のように、他国の図書館にまで手を伸ばして探そうとする知恵も意欲もなかったから結局お役に立てずじまいだった。かかる状況下で不可知論には陥らぬように留意されながらの執筆は、困難をきわめたであろう。

筆者は先生の業績を云々する任でないが、ひとつだけふれたい。『近代地理学の潮流』(1963)の稿本となった博士論文(1961)の副題は、「19世紀地理学史研究」であったが、上梓にあたって「形態学から生態

学へ」と変えられていることだ。この時点でこの視点をあえて示されたことは、現代の、文献訳出作業と一律に比べるわけにはいかないところの、地理学史研究への貢献のひとつだと思う。論点を整理・吟味する立場の確立に尽力されたおかげを、後学は蒙ることができるのだから。

ときには嘆かれることもあった。米国は日本から遠いが、その米国も欧諸国から離れているので、欧での当初の研究内容の濃度が何段階にも薄まったものを、本邦ではしかも遅れて読むことになってしまう、と。

先生は筆者の知る限りでも、茶道・書道・俳句・碁・草花などにお詳しく、関東ローム層にはなかなかなじまなかったようだが、しかしもっとも違和感を持っておられたのは、自省しながら書くが、遠くからつぎつぎに吹いてくる風に顔を向けるのに忙しくて「知」が個人内部に根ざし深化するには時間がかかるということ想像すらしないう風潮にはなかったか。

あの蟹目の眼鏡をかけ、首を軽く傾げながら、言葉を選んではその意味を確かめ味わうかのようにして、関西弁で語られると、穏やかな表現に聞こえがちだ。が、実は辛辣な批評、ということも多々あった。名指しこそされないが、研究不足を指摘される。顔をつきあわせているメンバーと因縁の深い研究者についてでもである。当時の筆者に、都市だけやっていたらいいのか、と問われたり、某修論については林学の方法でやっているにすぎないとおっしゃったり。うぬぼればたちまち怒られた。スウェーデン語を学んでおもしろがっていたら、新しい言語など1カ月もあれば読めるようになるはずだ、と。ドイツ語文献の英訳版しか読んでいないことが判明しようものなら相手にしないぞ、という雰囲気である。まして、AはBから研究上の影響を受けている、などと軽率な口をきこうものなら、「AはBの教を理解できなかったが、Bに拾われ研究の場を与えられただけだ」と、憤然とされる。また独創性をことのほか重視されたことも忘れがたい。論文は、引用文献が少ないほどに独創的であり、そうした文章なら短くてかまわないのだ、とアドバイスして下さる。C論文はD論文を再述したものである、という書き方もたびたびされた。記憶に新しいのは、牧口常三郎著の『人生地理学(復刻版)』(1976)の解題にあるご発言である。牧口は、まねでなしに、その当時日本に存在していない壮大な地理学の体系を提案したこと、そうした日本人は一人もいない、と座談会の席で評された。しかし、「牧口自身も書いているように経世家である」と付け加えることも忘れてはおられない。いつだったかP. E. Jamesに話が及んだときも、「しかし政治家ですよ」と話されたものだ。

だがこうした厳しさが、ご自身に対してはなおさら激しく向けられることになったのではないか。地理学史など始めなければよかった、と冗談めかして言われもした。あるいは、論文を提出した後はほっとするがたちまち消え入りたい位に恥づかしくなって下を向いて歩き、しばらくすると諦めがつき落ち着いてくる、とも。そんなときでも、先生よりはるかに低い次元の悩みでもお話しすれば、真正面を向かれ、ご教示下さるのが常だった。

こうして無理やり背伸びをしながら共に過ごさせていただいた時間は、筆者にとってかけがえのないものである。学問の深淵さが一瞬伝わってくる気のする至福のときであった。「ぼくは何杯でも飲みます」と、紅茶をおかわりなさりながら新しい論文を眺めては雑誌会のメンバーと会話を楽しまれた。耳に残っている例をあげると、Geomancy、「生きている細胞」、function、ゲートはもちろんグリムも。また言語学と地理学との関連、某著者の論理の特徴、伝統地理学とNew Geographyとのちがいを一言で表現すると、や果ては「るぶ」にまで及ぶといった具合だ。ときには、「学生と違って我々には残り時間が少ししかない」と、間接的に筆者の尻をたたかれもした。その反面、実に辛抱強く待つて下さるところもあった。投げ出さずにひとつのことに取り組んでいくうちに必ずわかる時が来る、と慰めても下さるのだ。

雑誌会と並んで、書き落とせないのが先生のゼミである。最初に、文献カードに植物の栽培・生育過程を図示されながらゼミナールの語源を説明された。その上で、いきなりプラトンの『饗宴』を読まされた。学問とは何か、学問のしかたも全くわかっておらん、ということらしかった。その頃、社会主義国に関心を持つ一人の受講者に、その国の地理学雑誌くらいは読ませようというねらいもあたりだったようだ。当時は面喰ったままだったが、今ならばプラトンを、なかでも『饗宴』を選ばれたことについていくらで

もお話ししたいのに、あるいは筆者にこそ猛省を促すおつもりだったような気もする。

しかし先生の厳しさにはやさしさが裏打ちされていた。稲田君と、先生のようなお方だと、我々院生にまでは賀状を下さるお時間などないだろうと話したことがあったが、後年、手紙はこういうときにこそ出すものだと言われることになった。10年余り前の大晦日に、それまでの極度の疲労が原因で寝返りがうてず、右腕全体の運動神経を2カ月間麻痺させたとき、鍼治療をすすめるお見舞い状を下された。また5年前、母が倒れたことに始まる家庭内の大きい変化の最中には、「お忙しいことです。家のことをくれぐれも大事に…」との文面が突然舞い込んだ。今も行間を読み返しては目頭が熱くなる。博士課程を満期退学して研究生になろうとしていたときにも、自宅へ話をしに来るようにとのお便りを下された。だが出不精を決め込んでいるうちに、昨年暮れ、先生のお宅からお電話をいただくことになってしまった。お見舞いに伺い、先生のお嬢様とお話しするうちに、先生のお人柄について得心がいった。亡くられる前日である。お嬢様が2度も命の瀬戸際に立たれたとき、先生はそれはもう心を痛められたとのこと。植物にとってもお詳しく、挿し木などお手のものであったこと。圧巻は、鉢の中に伸びてくる雑草を抜かずにおかれたことだ。お嬢様は内緒でそれを抜くたびに叱られたという。先生は、いつでもどこでもそうだったのだ。命あるものに細やかな愛情を注ぎ、その行く末を責任を持って見守りながらも、心は常に静かで無欲であられた。「名誉」など「どうでもよろし」かったのだ。

無理な延命を望まれない気丈な先生は、まだまだ力のある眼をしていらした。地理のことで聞いておきたいことがあったら今のうちに…、とお嬢様も、また先生も眼で、おっしゃって下さったが、後悔と無念さで胸が詰り、頭はからっぽになってしまった。渾身の力を込めて「さよなら」と言われた気もしたが、またお会いできると半ば信じて辞去した。だから今でも、筆者には先生が亡くなられたという実感がわからない。こうして追悼ならぬ自己弁護の文章を書いているのをそっと覗きこまれては、首をふって苦笑されているように思えてしかたがないのだ。

野間先生から教えて頂いたこと

仁 尾 泰 明 (神奈川県立川崎工業高等学校定時制)

誠に無念である。中村和郎先生から、野間先生が危篤という連絡を頂き、早速翌日、淵野辺の御自宅へ伺った。初めて伺う御自宅は意外に早く見つかった。ほっとした気持でブザーを押すと、どうも様子がおかしい。少し間をおいて、涙で目を濡らした御家族が出て来られ、5分前に息を引き取ったという。思いもよらぬ言葉に私は愕然とした。御家族に何と話をしたのかも覚えていない。

久しぶりに拝見する先生は非常に痩せられていた。もう御自分の力で食物を飲み込むことができなかったという。点滴も望まれなかったときく。しかし、お顔は安らかで、まるで眠っているようであった。どこか悟られたような感じにも見えた。御家族の好意で、先生の腕にも触れさせて頂いた。温かさがまだ十分残っていた。

先生との最初の出会いは、都立大学大学院入試の面接の時である。その時に、先生のお顔も初めて拝見した。私が緊張していたせいもあるかもしれないが、先生のお顔は晩年のリッターによく似ていた。眼鏡の形が同じなので、なおさらそう感じたのかもしれない。地理学史を専門的に研究すると、顔まで地理学の大家に似るものかと勝手に感心したりした。面接の内容では、次のことが今でも心に重く残っている。先生が「なぜ地理学史を研究したいのか」と質問されたのに対して、私は「地理学史の研究がまだ十分精密なところまで進んでいないから」と答えた。それに対して先生が「なぜそれがわかるのか」と質問されたので、私は「地理学史家のハンノー・ベックがそう嘆いているから」と答えた。すると「それはどの文献に出ているか」と訊かれたので、「先生の著書に出ています」と答えた。そうすると、先生は「それでは駄目です。ベックの文献に直接当たらなければいけません」と言われ、その場で私の学問に対する姿勢を直された。

先生のもとで学ぶようになってから、たびたび先生の研究室にお邪魔した。研究室に入るとすぐに大きな木製の机があり、先生は大抵そこで仕事をされていた。先生と向かい合って座ると、酒に弱い私にはアルコール抜き紅茶を出して下さり、引き出しの中から酒のつまみやお菓子を取り出して勧めてくれた。そこでは、研究の仕方について基本的なことから一つ一つ丁寧に教えて頂いた。文献の探索の仕方、文献の目録カードの作り方、原書の読み方、地理学史文献の紹介、日本の地理学史研究の現状、地理学史の研究方法などである。

先生によると、日本では原書に広く当たらず、しかも読破しないで地理学史をやる人が多いという。例えば、リッターの大著作に対して、その序文だけ、それも十数行だけを取り上げてリッターを評論する。また、少し勉強しただけで、あとは議論だけを膨らませる。それは実質のない議論なので、発展がなく、結局途中でやめざるを得なくなる。そうではなくて、大事なことは、まず自分の目で広く事実を確かめることである。それにはたくさん原書に当たり、たくさん原書を読まなければならない。そして、その自ら掴んだ事実の上になんて論証しなければならない。これが地理学史研究の科学的態度である。

とにかく、先生は「イージーなやり方では駄目だ」と何度もおっしゃった。また、大学院で地理学史をやる人は他の専門の人よりも3倍も5倍も努力しなければならない、と強調された。そのため、まず原書を読む訓練から始めた。わからないところがあってもどんどん読み進むこと、字引倒れになるな、2回、3回と読むにつれて意味がだんだんわかってくる、さらにたくさん読むことによって内容が理解できるようになる、そして最終的には速く正確に読破できるようにならなくてはならない。これが原書の読み方である。さらに、先生は御自分の体験を話されて、読む力の乏しい私に奮起を促された。先生は、学生時代、中村新太郎先生(京大文学部)から原書を借りて、一週間に一冊ぐらいの割合で読まれたそうだ。単に読むだけでなく、読破した原書の内容を中村先生に話さなければならなかった。そのために、朝から晩まで部屋に閉じ籠って読んだり、外出する時も歩きながら読んだとのこと。また、読み過ぎたために、図

書館で倒れたこともあったときく。そのお陰で、先生は原書を読む癖が付き、また原書に慣れて、速く読めるようになった、とおっしゃっていた。

夕方、たまに先生と一緒に帰ることもあった。研究室へお迎えにいくと、先生は部屋の奥にあるスチール製の机の前に立ち、中折れ帽子をとられて、机の前の壁に掛けた写真をじっと見つめ、それから写真に一礼されて部屋を出られた。写真は、先生が敬愛されていた藤田元春先生である。藤田先生には『日本地理学史』という著書があるが、藤田先生のことについては先生からほとんど伺ったことはない。しかし、先生が書かれた「晩年の藤田先生」という追悼文を読むと、先生の藤田先生に対するお気持ちがよくわかる。私達には無言の教えであった。

大学から都立大学駅まで歩いて15分ぐらいであったろうか。一日の仕事が終わった解放感で、気持ちも足取りも軽く、自然と楽しくお話ができた。私は調子に乗って、普段訊きにくいことまでお訊きしたように思う。先生のお話を思い出すままにいくつかあげてみると、先生の主著の『近代地理学の潮流』をドイツ人がドイツ語に翻訳して出版したいという話がある、またその主著の続編を出す予定があってヘットナーの少し前から書く、先生が地理学を専攻しないで東洋史を専攻していたらもっと業績を上げることができた（それはおそらく地理学史の研究には長い年月がかかるので、地理学史を学問とすることの難しさを言っておられるのだと思う）、などで、その他内外の地理学者についてのお話などもあった。都立大学駅に着くと、先生は駅前の店に立ち寄られ、喉を潤し、一息ついてから帰られた。お相手のできない私は、いつも先に失礼した。

先生が担当された大学院のMゼミでは、ハゲットの『人文地理学における立地分析』を読んだ。院生が予め割り当てられた範囲を読んで内容を要約し、それを授業で発表する。その後で発表の内容を話題にして皆で話し合うものである。そこでは、計量地理学の知識に乏しい私は、あまりできのよい受講生ではなかったようだ。それを見越してか、先生は、人文地理学の研究には調べただけで理論なしというのが多い、人文地理学でも理論がなければならない、その理論は必要から生まれる、故に理論は正しいというより有用性が大事であると、服の型紙の例を引いて説明され、理論化の必要性を教えられた。また、本当の話合いの仕方とはどういうものなのかを私達にわからせるために、プラトンの『饗宴』を読むように勧められた。さらに、それに関連してお酒の飲み方も教えられた。これらは今でも役に立っている。

修士論文では、ヘットナーを扱うことになった。それに関係した文献を集め始めると、残念ながら当時の都立大学では十分揃わなかった。また、先生から、ヘットナーの1927年の主著に頼ってはいけない、その主著は論文を寄せ集めて圧縮したものなので生々しさが削られてしまっている、だから個々の論文にまで目を通さなければならない、という助言があった。そのようなわけで、私は学外に文献を求め、探索を始めた。ところが、わが国では地理学史研究関係の文献が少なく、しかも場所的に散在している。そのため、都内だけでなく、地方の各大学の研究室や図書館まで訪ねることにした。その時には、先生にはわざわざ訪問先まで連絡を取って頂いたり、紹介状を書いて頂いたりした。そのお陰で、私は自分の目的をスムーズに果たすことができた。例えば、山梨大学では山岡政喜先生が自ら論文の探索から複写まで面倒を見て下さり、さらに宿泊の心配までして頂いた。

修士論文は、文献が集まったのにもかかわらず、なかなか捗らなかった。先生からは、論文は難儀しなければ書けない、顔が青ざめるぐらい文献を読みなさい、顔色がよいのでまだまだ駄目だ、とよく激励を頂いた。そのお陰で何とか論文を書き上げ、修士課程を修了することができた。進路は、修士論文でリッターを扱った故村関信男先輩と同じく、高等学校の教職の道を選んだ。

教育の現場に進んでからは、グレコ会にはあまり出席できなくなった。当然、先生とお会いする機会も極端に減った。それでも、都合をつけてたまに出ると、先生は、教育の現場に身を置きながらも地理学の研究を進めなさい、とよくおっしゃった。昔から地理学の理論は地理教育の先生がつくってきた、例えばイギリスの地理学雑誌 *Geography* はもとは *Geographical Teacher* といった、今日の新しい地理学でも地理学と地理教育が一緒になって *New Geography* というのであって、*New Geography* を教育の現場に下ろすことをいうのではない、と地理学の発達歴史を通して強調された。さらに、先生から「小生もボツ

ボツ地理教育にも関心を向けねばと考えているところ、実地を知らないので弱いです」というお葉書も頂いた。実際に、先生は創価大学で付属の小学校の先生方と研究会をもたれ、社会科教育を研究された。

教職に就く時に先生からは「教育は植物を育てるのと同じである」というお言葉を頂いた。これはいまでも忘れることのできない大切な言葉である。その意味するところは、植物を育てるには、土をよく耕し、水を撒き、肥料をやり、雑草を取り除き、余分な葉や枝を切り取って育てるように、人も愛情をもって根気よく育てていかなければならないということであろうか。同じような言葉を教員をされている御子息にもおっしゃったと、法要の席で伺った。そういえば、私が先生から頂いた数々の指導や激励もこのようなものであったと思えてならない。いつも、そこには先生の優しいお心遣いがあったと思う。不肖の私をここまで根気よく導いて下さった先生のお心に感謝するとともに、実際に教育に携わる者として先生のお言葉の重みをますます感じる次第である。

野間先生

飯野民夫（埼玉県立所沢高等学校）

先生は、まさに世界の激動の年におなくなりになった。1991年、この年は世界史の上にも大きなエポックを画する（この言葉を先生は、好んでたびたび使われたように思う）年となった。

人為的国境から自然的国境への推移が、地理学発展の重要な契機となったと、著書にも書かれ、お話しされていたのを思う時、これから21世紀に向けての世界が、どんな風が変わっていくと予測されていたのか、もう一度お話を伺えれば良かったと、今強く思う。

先生には多くのことを教えていただいた。忘れもしない、最初のゼミで先生の研究室に入った時、ウィスキーの壺がズラーと並んでいたのを、机の前に座ると先生は、まず紙の上に大学周辺の地図を描かれ、「ここここに酒屋がある、ビールをこうてきてもらえますかあ」と話された。

夕闇が迫ると「そろそろ飲みに行きますかあ」と都立大駅前の飲み屋に連れて行って下さった。そこが本当の授業だったのかもしれない。「あなたの話す言葉には“やっぱり”が多過ぎる。この言葉を沢山使ったら、論理的な考え方、自分独自の考えは出来んのだよ。」「このあいだすし屋で一人で飲んでいたら、『旦那さんは刑事でしょう』とすし屋のおやじに言われた」と苦笑しながら話された。注文は指でさすだけで、何も言わずにじっくり飲んでいただけなので間違えられよったと上機嫌。常に自分の頭で考えなければいけないということを強く教えられたのだった。酒の飲み方についても「外で酒を飲むのはいいが、ハシゴはしてはいけない。」（私は、社会人になりたての頃、この禁を破って何度か大失敗した。）重そうな鞆を持って登校され、鞆を開くと、そこから角壺が二本出てくるという光景、おせんべをわりわり水割りを飲みながら、赤鉛筆で、洋書にアンダーラインを引かれていた姿が、今でも目に焼きついている。

「卒論を持ってらっしゃい。」多少の自信はあったつもりで、読んでいただいたところ、「週刊誌の編集でもしたのですか」とバツサリ。厚いドイツ語の本を渡され、一週間後にやっとコピーして、お返しにあげると「もう全部読んでしまいましたね。」かくして落第生は、その後お酒のお相手専門家となる。

「数学の先生はええなあ。一日囲碁を覗んでいても仕事になるんやから。」囲碁もお好きでらした先生は、一見、古代ギリシアの哲学者を思わせる風貌で、近寄りたがたい雰囲気を見せてらした。ある時、自分の学生の頃の話になって「西田幾多郎の講義を聴いたけれど、あれにはビックリした。『今日は、何々について考えます』と言ったきり、教壇の上を行ったり来たり、何も言わないで本当に考え始めた。学生は唯、それを見てるだけだ。」先生の熟考癖も大哲学者に教わられたのではあるまいか。先生にはどうも地理学を研究されるより、ほかにもっと向いていた学問がおありになったのではないか。

私と同じ年（昭和46年）にマスターコースに入った仲間に、村関君がいて、彼は勉強の虫だったから、先生の覚えめでたくカール・リッターを研究テーマに与えられ、京大図書館に行ったり来たりで、二年後には無事に修論をパスして都立高校の先生になられた。唯、惜しいかな就職した年の夏休みに、林間学校引率の過労から帰らぬ人になってしまった。就職後も、リッターを一生懸命読んでおられたそうで、本当に今生きていればとつくづく残念に思う。野間先生はじめみんな、赤羽のお宅へお悔やみにあがったのを昨日のこのように覚えている。

私の教育大当時の卒論“風土についての若干の考察”は、噴飯物であったが、唯、先生はこの中に出てくる「ヘルダーは読むに値する。このあたりを読んだらどうですかあ」と薦めて下さった。「今、ヘルダーをやっている人はほとんどいないだろうから、2,30年後には価値が出てきますぞ。」ヘルダーという人はカントの理性的哲学に反対の立場をとった人で、人間の感性を重んじた人である。合理主義的法則性で一切を裁断するのではなく、むしろ反法則的現象を民族や風土の中に見い出していこうとする人であった。私は図書館をいくつかまわったけれど、彼の主著『人類史の哲学への理念』という本を探すことはできなかった。

ある時先生に「公害がますます大きくなっていくと人間はどうなるんでしょう」と伺った時、先生は即座に平然と語られたのを思い出す。「毒ガスを吸っても生きていける人間が生き残るんや」と。先生はあくまでも、物事をエコロジカルに見ていた人であったなあとと思う。そういえば、先生と接した三年間、先生の口から政治に関する話は一切、耳にしなかったのを思い出す。むしろ、イデオロギーというものを忌避されていたふしがあった。ある意味でさきのヘルダー的立場とは逆に、サイエンティフィックにものを考えることを自分の使命にされたに違いない。

ドイツ語もまともに読めない分際であったが、二年の時学生結婚をしようと思い、先生にお仲人をお願いしようと伺ったところ一日おいて「女房が着物がなくて断わってくれということで……。だいぶ昔、苦勞させたもので……。」と申し訳なさそうにお断りを受けてしまった。暖かいお人柄を感じたものだった。

勉強嫌いの小生は、その後まったくの田舎教師を決めこんでしまい、御無沙汰をしたままやみくもに年月を経させてしまった。(私事で恐縮至極—私は九月に長男を病気で失ない)悲嘆の日々を過ごしている最中に、またまた悲報に接してしまった。今思うと、お酒を飲まれた時に、先生が語られたことをすべてテープに取っておけばよかった。立派な科学論(人生論)が一冊出来上がっていたらうに。

先生の数多くの教えの中でも、就中「何でも良いから、何かひとつモノサシになるものを持ちなさい」という教えは、今教職にある身で、半分受け売りであるが、生徒に強く訴えていることのひとつである。

“酒中に真あり”

先生の御冥福を心から念じ申し上げます。

1992・2・19記